

泉大津市文化財調査報告10

泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報 3

1985・3

泉大津市教育委員会



泉大津市文化財調査報告10

泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報3

1985・3

泉大津市教育委員会

例　　言

1. 本調査概報は、泉大津市教育委員会が、市内に所在する埋蔵文化財包蔵地内において、開発行為に先立って実施した発掘調査記録である。
2. 本調査は、泉大津市が国庫補助事業および、大阪府補助事業（総額5,000,000円、国補助率50%、府補助率25%、市負担率25%）として、計画・実施したものである。
3. 本調査は下記の構成で実施した。

調査主体者 泉大津市教育委員会教育長 藤原勇三

調査担当者 泉大津市教育委員会社会教育課 坂口昌男

調査員 楠山享司

調査補助員 池田 穀・小林 清・畠中尚子・満留由美子
小森正子

調査参加者 貴志正則・岩城 一・柴原克夫・大橋陽子

事務局 泉大津市教育委員会社会教育課（課長鈴木実）

4. 本事業は、昭和59年度事業として、昭和59年4月1日に着手し、昭和60年3月30日に完了した。

5. 本調査概報では、遺物実測図および遺物写真には、共通する番号をつけ、本文においてもこの番号を使用した。

目 次

第1章 1984年度調査内容.....	1
第2章 地理・歴史的環境.....	6
第1節 市内の地理.....	6
第2節 市内各遺跡の概略.....	7
第3章 発掘調査報告.....	12
第1節 板原遺跡.....	12
1 調査に至る経過.....	12
2 調査結果.....	13
第2節 池浦遺跡.....	13
1 調査に至る経過.....	13
2 調査結果.....	14
第3節 池上・曾根遺跡.....	17
1 調査に至る経過.....	17
2 調査結果.....	18
第1地点.....	18
第2地点.....	18
第4節 豊中遺跡.....	19
1 調査に至る経過.....	19
2 調査結果.....	20
第1地点.....	20
遺構.....	20
遺物.....	23
第2地点.....	24
遺構.....	24
遺物.....	26

第5節 虫取遺跡出土遺物	30
1 遺跡・遺構の概略	30
2 縄文後期・晩期の土器	31
3 縄文要素を残す土器	35
4 縄文晩期・弥生前期の石製品	36
第4章 まとめ	42
引用文献	43
遺物観察表	45

插図

第1図 泉大津市地形図	6
第2図 遺跡分布図	8
第3図 板原遺跡調査地点図	12
第4図 板原遺跡トレンチ断面図	13
第5図 池浦遺跡調査地点図	14
第6図 池浦遺跡調査位置略図	15
第7図 池浦遺跡トレンチ断面図	15
第8図 池浦遺跡出土遺物	16
第9図 池上・曾根遺跡調査地点図	17
第10図 池上・曾根遺跡 第1地点トレンチ断面図	18
第11図 池上・曾根遺跡 第1地点出土遺物	18
第12図 池上・曾根遺跡 第2地点トレンチ断面図	19
第13図 池上・曾根遺跡 第2地点出土遺物	19
第14図 豊中遺跡調査地点図	20
第15図 豊中遺跡 第1地点調査位置図	20
第16図 豊中遺跡 第1地点遺構図	21
第17図 豊中遺跡 第1地点断面図	23
第18図 豊中遺跡 第1地点出土遺物	24

第19図	豊中遺跡 第2地点調査位置図	25
第20図	豊中遺跡 第2地点遺構図	25
第21図	豊中遺跡 第2地点断面図	26
第22図	豊中遺跡 第2地点出土遺物	27
第23図	豊中遺跡 第2地点出土遺物	28
第24図	虫取遺跡位置図	30
第25図	虫取遺跡遺構図	30
第26図	虫取遺跡溝4断面図	31
第27図	虫取遺跡出土遺物	33
第28図	虫取遺跡出土遺物	35
第29図	虫取遺跡出土遺物	36
第30図	虫取遺跡出土遺物	37
第31図	虫取遺跡出土遺物	38
第32図	虫取遺跡出土遺物	39
第33図	虫取遺跡出土遺物	40

插表

表 1	1984年度調査一覧表	1
表 2	前年度調査補足一覧表	5
表 3	掘立柱建物ピット一覧表	22
表 4	縄文時代晩期の一覧表	34

図版

- 1 板原遺跡トレンチ・池浦遺跡トレンチ
- 2 池上・曾根遺跡 第1地点トレンチ・第2地点トレンチ
- 3 豊中遺跡 第1地点ピット・全景
- 4 豊中遺跡 第2地点試掘トレンチ・全景
- 5 · 6 · 7 · 8 · 9 出土遺物

第1章 1984年度調査内容

昭和59年度（1984年度）の調査報告とするのは、泉大津市教育委員会が国庫補助対象事業の一環として、市内に所在する各埋蔵文化財包蔵地内（各遺跡）において実施した、立会調査・試掘調査・発掘調査の調査結果である。

調査における、実施日・調査地番・遺跡名・調査内容・備考については、「1984年度調査一覧表」に示しておいた。報告を必要とする発掘調査に関しては、調査概要を後述しておく。

本書（泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報3）の編集の都合上、発掘調査記録（報告）は、昭和60年2月28日までとしておく。なお後に、前年度分昭和59年3月1日から3月31日までの発掘調査記録を補っておく。

（坂口）

表1 1984年度調査一覧表

（但し、1984年4月1日から1985年2月28日）

月 日	調 査 地 番	遺 跡 名	調 査 内 容	備 考
4・28	北豊中町2丁目9-11	豊中遺跡	立会調査	ガス管理設工事による掘削で、観察の結果支障なし
5・14	板原321-4,-1	虫取遺跡	立会調査	住宅建設工事によるもので、基礎掘削後観察の結果支障なし
5・15	板原1048	虫取遺跡	立会調査	ガス管理設工事による掘削で、観察の結果支障なし
5・16	北豊中町977	豊中遺跡	立会調査	ガス管理設工事による掘削で、観察の結果支障なし
5・17	板原216	虫取遺跡	立会調査	ガス管理設工事による掘削で、観察の結果支障なし
5・19	尾井千原328	大園遺跡	立会調査	ガス管理設工事による掘削で、観察の結果支障なし
5・28	森町2丁目227-164	池上・曾根遺跡	発掘調査	遺構・遺物等認められず
5・30	我孫子1461-1, 149-3	板原遺跡	立会調査	住宅の建設工事によるもので、基礎掘削後観察の結果支障なし
6・1	板原76	板原遺跡	立会調査	住宅建設工事によるもので、基礎掘削後観察の結果支障なし
6・4	尾井千原328	大園遺跡	立会調査	ガス管理設工事による掘削で、観察の結果支障なし
6・5	森町2丁目20	池上・曾根遺跡	立会調査	ガス管理設工事による掘削で、観察の結果支障なし

月 日	調査地番	遺跡名	調査内容	備考
6・7	森町2丁目227-65,-158	池上・曾根遺跡	発掘調査	遺構・遺物等認められず
6・8	下条町168-39	池浦遺跡	立会調査	住宅建設工事によるもので、基礎掘削後観察の結果支障なし
6・11	板原70-2	板原遺跡	発掘調査	遺構・遺物等認められず
6・12	北豊中町2丁目8-14	豊中遺跡	立会調査	浄化槽埋設工事による掘削で、観察の結果支障なし
6・18	宮町139-1	池浦遺跡	立会調査	ガス管埋設工事による掘削で、観察の結果支障なし
6・25	宮町87-88-5	池浦遺跡	立会調査	住宅建設工事によるもので、基礎掘削後観察の結果支障なし
6・28	板原324	虫取遺跡	立会調査	住宅及び社屋建設工事によるもので、基礎掘削は盛土内におさまっており、支障なし
7・2	宇多1048-41	虫取遺跡	立会調査	住宅建設工事によるもので、基礎掘削後観察の結果支障なし
7・6	我孫子177	虫取遺跡	立会調査	倉庫建設工事によるもので、基礎掘削後観察の結果支障なし
7・6	我孫子238	虫取遺跡	立会調査	住宅建設工事によるもので、基礎掘削後観察の結果ガラ及び湧水がみられただけ支障なし
7・9	東助松町1丁目14-7	森遺跡	立会調査	ガス管撤去工事によるもので、既に掘削がなされており支障なし
7・10	宇多1051-9	虫取遺跡	立会調査	住宅建設工事によるもので、基礎掘削は盛土内におさまっており支障なし
7・13	東助松町1丁目427	森遺跡	立会調査	ガス管撤去工事によるもので、既に掘削がなされており支障なし
7・18	豊中887-1	板原遺跡	発掘調査	遺構・遺物等認められず
7・19	宮町88-5	池浦遺跡	立会調査	ガス管埋設工事によるもので、既に掘削がなされており支障なし
7・20	森町2丁目23-16	池上・曾根遺跡	立会調査	ガス管埋設工事によるもので、池を埋め立てた部分にあたり支障なし
7・21	曾根町1丁目3-17	池上・曾根遺跡	立会調査	ガス管埋設工事によるもので、既に掘削がなされており支障なし
7・24	豊中280, 281, 282, 283,	豊中遺跡	発掘調査	第1トレンチより古墳時代の土器片出土、遺構は認められず。第2・第3・第4トレンチは遺構・遺物等認められず
8・3 8・25	東豊中町963-4,-5,	豊中遺跡	発掘調査	古墳時代の土器片(庄内から布留)、須恵器片、古墳時代の竪穴住居2 上層ピット約30。溝1
8・8	北豊中町3丁目979-9	豊中遺跡	立会調査	基礎掘削は盛土内におさまっており支障なし
8・20	宇多1051-8	虫取遺跡	立会調査	基礎掘削は盛土上におさまっており支障なし

月 日	調 査 地 番	遺 跡 名	調 査 内 容	備 考
8・21	我孫子139-3, 140-1,	虫取遺跡周辺部	立会調査	基礎掘削は盛土内におさまっており、支障なし
8・23	我孫子102	板原遺跡	発掘調査	遺構・遺物等認められず
8・27 9・3	板原16, 17 東農中町2丁目963-7	板原遺跡 豊中遺跡	発掘調査	古墳時代の土師器片出土、遺構は認められず 古墳時代の土師器片、須恵器片出土、古墳時代の溝2、ピット約20、落ち込み2、獨立柱建物1
9・4	池浦町5丁目206-5	池浦遺跡	発掘調査	弥生時代中期の築出土、弥生時代中期の溝検出
9・7	宇多1051-10	虫取遺跡	立会調査	ガス管埋設工事によるもので、観察の結果支障なし
9・8	東雲町4-14	東雲遺跡	立会調査	ガス管埋設工事によるもので、観察の結果支障なし
9・11	北農中町2丁目10-19	豊中遺跡	立会調査	ガス管撤去工事によるもので、既に掘削がなされており支障なし
9・12	森町2丁目225-2, -3, -4, 226-4, -5, -6	池上・曾根遺跡	発掘調査	古墳時代の土師器片、須恵器片出土。土師質皿出土。遺構検出されず
9・14	板原133	板原遺跡	立会調査	ガス管埋設工事によるもので、観察の結果支障なし
10・1	寿町623	池浦遺跡	立会調査	住宅建設工事によるもので、観察の結果支障なし
10・2	穴田80	板原遺跡	立会調査	広告塔建設工事によるもので、観察の結果支障なし
10・3	宇多1051-8	虫取遺跡	立会調査	ガス管埋設工事によるもので、観察の結果支障なし
10・3	板原333-1	虫取遺跡	立会調査	ガス管埋設工事によるもので、観察の結果支障なし
10・4	東農中町1丁目 967-7, -8, -9,	古池遺跡	立会調査	既調査地で、基礎掘削は盛土内におさまっており、支障なし
10・6	穴田77-1	板原遺跡	立会調査	広告塔建設工事によるもので、観察の結果支障なし
10・20	森町1丁目107-1	池上・曾根遺跡	立会調査	住宅建設工事によるもので、観察の結果支障なし
10・22	下条町1-6	東雲遺跡	立会調査	住宅建設工事によるもので、観察の結果支障なし
10・26	我孫子149-1	板原遺跡	立会調査	住宅建設工事によるもので、観察の結果支障なし
11・5	下条町10-19	池浦遺跡	立会調査	ガス管埋設工事によるもので、観察の結果支障なし
11・8	池浦町4丁目221-1	池浦遺跡	立会調査	住宅建設工事によるもので、観察の結果支障なし

月 日	調 査 地 番	遺 跡 名	調 査 内 容	備 考
11・8	末広町1-8	大岡遺跡	立会調査	ガス管埋設工事によるもので、観察の結果支障なし
11・9	東助松町1丁目416-1	森遺跡	立会調査	店舗建設工事によるもので、観察の結果支障なし
11・13	宇多1051-9	虫取遺跡	立会調査	店舗建設工事によるもので、観察の結果支障なし
11・22	森町2丁目207-2	池上・曾根遺跡	発掘調査	古墳時代の土師器片、須恵器片出土。中世の瓦器皿出土。遺構は認められず
11・26	宇多1051	虫取遺跡	立会調査	店舗建設工事によるもので、観察の結果支障なし
11・27	池浦町4丁目9-5	池浦遺跡	立会調査	店舗建設工事によるもので、観察の結果支障なし
12・5	我孫子40-1, 42, 44,	穴田遺跡	立会調査	住宅建設工事によるもので、基礎掘削は耕土内におさまっており支障なし
12・6	虫取47-2	虫取遺跡	立会調査	地下ガソリンタンク撤去工事によるもので、観察の結果支障なし
1・16	我孫子177	虫取遺跡	立会調査	既設建物の撤去による工事で、支障なし
1・17 1・28	北豊中町2丁目502-1	七ノ坪遺跡	発掘調査	弥生時代後期窯、古墳時代土師器出土。遺構は認められず
1・31	助松町3丁目 743-7, 745-2, 749,	助松遺跡	立会調査	基礎掘削後観察の結果、支障なし
2・7	末広町1丁目5-15	大原遺跡	立会調査	基礎掘削は盛土内におさまっており、支障なし
2・9	寿町455-1	池浦遺跡	立会調査	基礎は盛土内のために支障なし
2・12	板原337	虫取遺跡	発掘調査	遺構・遺物等認められず

表2 前年度調査補足一覧表

(但し、1984年3月1日から1984年3月31日)

月 日	調査地番	遺跡名	調査内容	備考
3・6	穴田70-1, 3, 4,	板原遺跡	立会調査	基礎は盛土内のため支障なし
3・7	東豊中町2丁目960-14	豊中遺跡	立会調査	ガス管理設工事による掘削で、観察の結果支障なし
3・7	板原	板原遺跡	立会調査	ガス管理設工事による掘削で、観察の結果支障なし
3・8	曾根町1丁目8-3	地上・曾根遺跡	立会調査	ガス管理設工事による掘削で、観察の結果支障なし
3・9	下条町126	池浦遺跡	立会調査	ガス管理設工事による掘削で、観察の結果支障なし
3・21 3・31	東豊中町2丁目959-8	豊中遺跡	発掘調査	古墳時代の土師器、須恵器出土 古墳時代の足跡、上層ピット多数、獨立柱建物2、東地区で近世後期以降の井)1

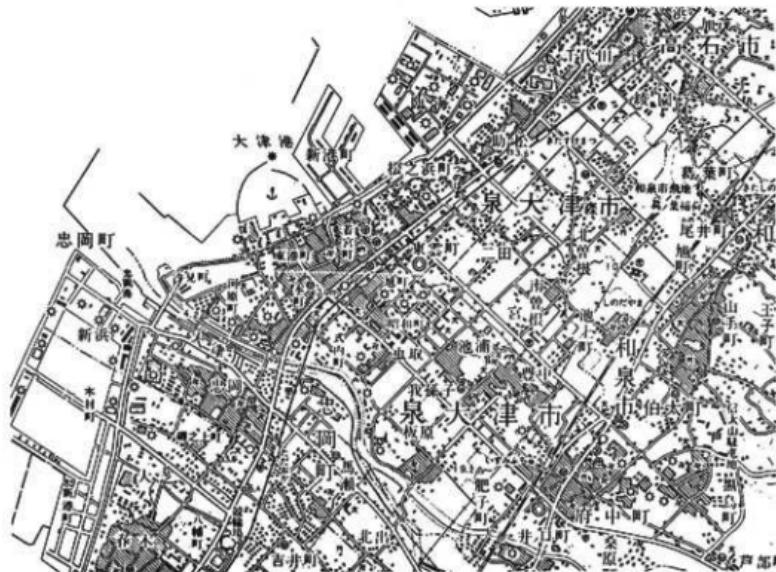
第2章 地理・歴史的環境

第1節 市内の地理

大阪府泉大津市は、大阪平野南部（和泉地域）の海岸部に位置する。この地域の気候は温暖であり降雨量もそれほど多くなく、瀬戸内式気候に属している。温暖な気候に恵まれ、生活の場として、早くから開けていた事が、弥生時代の集落「池上弥生ムラ」（池上曾根遺跡）の存在からもうかがえる。また、奈良・平安時代には、現在の和泉市府中町に国府が置かれており、その国府津として、泉大津市の海岸部は、当時「小津の浦」と呼ばれ、栄えていた。

泉大津市の西側は大阪湾に面し、北側を高石市、南側は大津川を隔てて泉北郡忠岡町、東側を和泉市と隣接しており、山間部は含まない。市の面積は11.53km²で人口は68,494人と小規模の都市ではあるが、昭和17年に府下で7番目に市となっている。

私鉄南海電鉄南海線は、市を南北に横切り、大阪市と和歌山市間を結んでいる。北側から北助松駅・松之浜駅・泉大津駅の3駅があり、急行の止まる泉大津駅から、大阪難波駅まで急行で約



第1図 泉大津市地形図

「この地図は建設省国土地理院発行の5万分の1の地形図を使用したものである。」

20分と、非常に近距離にある。

市内西部の海岸沿いには、この南海線と平行して、府道堺阪南線・大阪臨海線の道路が、東部には、国道26号線（第2阪和国道）が、それぞれ南北に延びている。また、市内を東西に結ぶ道路として、松之浜曾根線・美原泉大津線・泉大津中央線・泉大津粉河線がある。

市街地は、府道堺阪南線と南海電鉄線に沿って、古くより住宅と商工業用建物で形成されてきた。しかし、昭和45年に開催された日本万国博覧会を契機に、大阪南部は商業都市大阪のベッドタウンとして注目されだし、市域全体が市街地化区域となった。この為、水田地帯が広がっていた市の東部にも、宅地開発の波が押し寄せ、市街地化が進行している。また、市内に20数個あった溜池の大半が埋め立てられ、住宅・団地・工場・公園・小学校・公民館などに転用されている。

市の地場産業は、毛布を中心とする織物工業であるが、近年、海岸側が堺・泉北臨海工業地帯として埋め立てられ、工場や倉庫が立ち並び、また、カーフェリーなどが発着するなど、港湾の都市としても発展している。

さらにこの地域では、現在、泉州沖の新空港建設計画に伴ない、交通網の整備や土地開発がめまぐるしくおこなわれつつある。

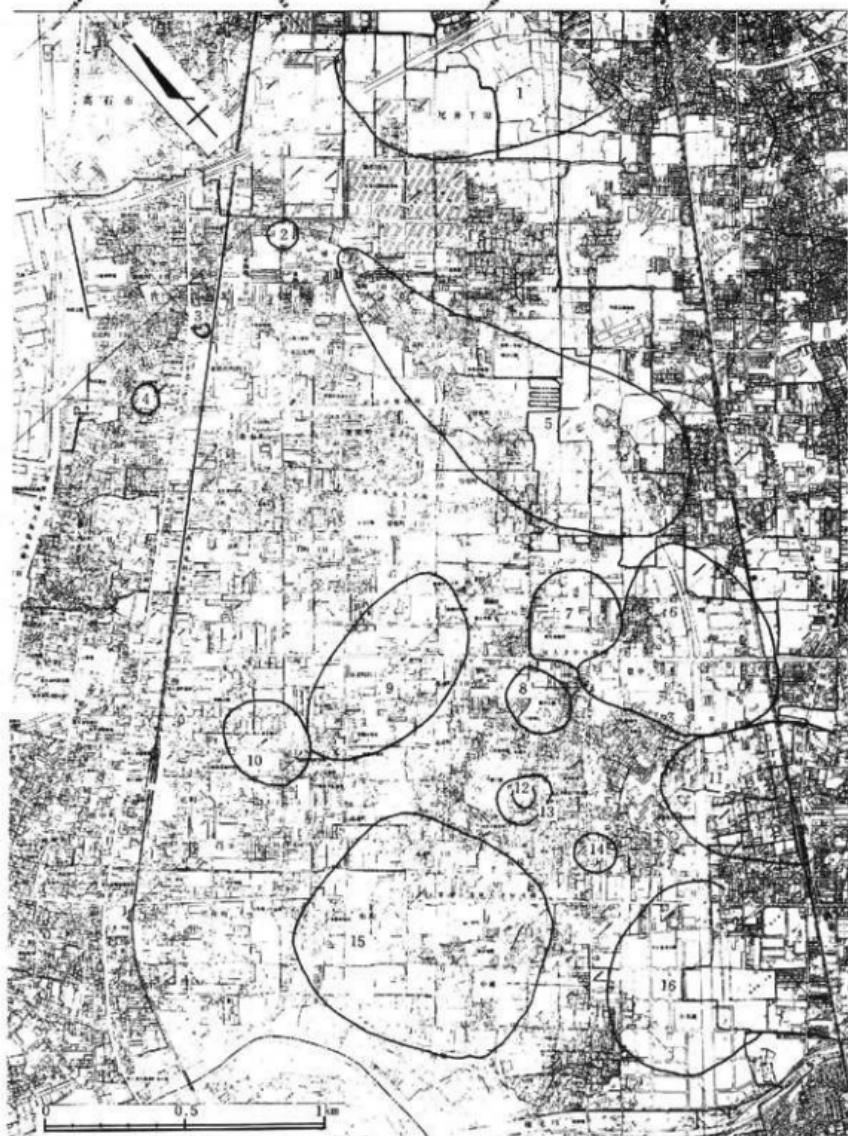
(池田)

第2節 市内各遺跡の概略

板原遺跡は、豊中吉池遺跡調査会による試掘調査において、縄文時代後期の「中津式」に対応する時期とそれに近い時期の、波状口縁をなす太い沈線をめぐらす深鉢形土器の口縁片や底部片の出土がある。また古墳時代の須恵器、中世の瓦器の出土もあった。府教育委員会の調査においても、縄文時代後期の自然流路が確認されて、「中津式」および「中津式」に並行の土器が出上している。また古墳時代土壙内から布留式の土師器と、平安時代の掘立柱建物1棟と溝1条、そして鎌倉時代の掘立柱建物7棟と溝が検出されている。縄文時代後期・晩期から始まる遺跡と考えられるが、定住に使ったものと考えるよりもむしろ季節的なキャンプサイトの跡と考えた方が適当であろう。それは、中期末に属する土器片が炭・灰・焼土を伴って発見されている事でもうかがえる。昭和58年度の市教育委員会による発掘調査の結果、上層暗灰色粘土より奈良時代後期から平安時代中期にかけての黒色土器片、下層茶灰色粘土より古墳時代の土師器片、須恵器片を検出している。古墳時代初期から平安時代および鎌倉時代に至る複合遺跡である。

虫取遺跡は、府教育委員会の調査において、縄文時代晩期の土器や、弥生時代前期の土器を検出し、弥生前期から始まる遺跡として知られている。

市教育委員会の虫取遺跡第1次発掘調査において、縄文時代後期・晩期の土器片や、弥生時代



第2図 遺跡分布図

1.大園遺跡 2.森遺跡 3.牛池塚 4.鈴松遺跡 5.地上曾根遺跡 6.豊中遺跡 7.七ノ坪遺跡
 8.穴師遺跡 9.池浦遺跡 10.東素遺跡 11.吉池遺跡 12.穴師小学校校庭遺跡
 13.穴師薬師寺跡 14.穴田遺跡 15.虫取遺跡 16.板原遺跡

前期（第Ⅰ様式新段階）の遺物が人工的V字溝から多量に出土している。また古墳時代の須恵器、奈良平安時代の土師質土器片、中世の瓦質土器片が出土している。^④

東雲遺跡は、古墳時代中期初頭から鎌倉時代初期に至る集落遺跡である。古墳時代の竪穴住居、井戸、溝が検出され、布留式の土師器が出土している。また奈良時代・平安時代の掘立柱建物が10数棟検出されている。これらのものは何度も建て直されており、一時期に建てられたものでない事は、建物の主軸方向が異なっている事や、重複している事からでも判断出来る。なおこの掘立柱建物の中に鎌倉時代初期に至る可能性のある建物も検出されている。^⑤

古池遺跡は、上池地区からは布留式の土師器、8世紀までの須恵器、古墳時代の木製品を多量に出土している。また縄文時代中期後半の土器片の出土もある。府教育委員会の調査による要池地区のA地区からは弥生時代中期の壺形土器、古墳時代の須恵器、奈良時代の須恵器や土師器、鎌倉時代の器を含む溝が検出されている。C地区からは鎌倉時代の仓库建物や掘立柱建物が検出されている。また東接する地区でも平安時代後半から鎌倉時代に属する掘立柱建物の検出がある。古墳時代から鎌倉時代に至る複合遺跡である。^⑥

大田遺跡は、瓦器や青磁や常滑陶器や中世遺物、土釜井戸の遺構が検出されている。^⑦

穴師小学校校庭遺跡は、工事中に弥生時代中期の臺棺が発見されている。現在この遺跡は校庭内にあるため、充分な発掘調査が行なわれておらず、解明出来ていない遺跡の一つである。

穴師遺跡は、市教育委員会の試掘調査において、古墳時代の須恵器や土師器の破片、白磁片、中世の瓦器片の出土がある。

池浦遺跡は、弥生時代前期から始まる遺跡である。第Ⅰ様式中段階から始まり、中期に遺跡の規模は著しく縮少されている。低位段丘に位置しており、人工的V字溝で住居区を限定していたようである。市教育委員会の調査でも弥生土器を出土している。^⑧

七ノ坪遺跡は、泉大津高校地盤部や府教育委員会の調査によって、古墳時代の土師器、須恵器や中世遺物の破片が出土されている。遺構としては竪穴住居跡が6つ、方形周溝墓が1つ、木棺直葬墓が1つ検出されている。なおこの方形周溝墓は弥生時代の墓形態の1つであり、古墳時代に入ってしまっていたと思われる。また市教育委員会の調査でも、弥生式土器長頸壺形土器、第Ⅴ様式に属するタタキ目調整の甕や古墳時代の土師器の出土がある。泉大津高校外の北東地区の調査では、造溝面より第Ⅴ様式に属する甕の出土、溝からは古墳時代の布留式土師器が多量に出土している。また府教育委員会の調査で、南限および南西限と考えられる泉大津高校敷地内のグランドで、古墳時代初期およびそれ以前の水田跡が発見された。七ノ坪遺跡における古墳時代の生活の場（集落）、生産の場（水田）、埋葬の場（墓）が少しずつ解明されている。

豊中遺跡は、豊中地区に存在し東西800m、南北1000m、という大遺跡である。弥生時代から古

墳時代にかけては集落の広がりを示した。自然河川が流れているが奈良時代頃に埋もれている。
平安時代～中世に至る遺跡である。

昭和50年度発掘調査においては、古墳時代のピットを検出、古墳時代の土師器・須恵器、中世の瓦器・瓦質糸釜の破片が出土している。昭和52年度発掘調査においては、井戸16基が検出され、うち古墳時代6基、中世10基である。溝は、古墳時代2条と中世5条の7条が検出されている。
古墳時代の堅穴住居跡も1基検出されている。昭和53年度発掘調査においては、井戸が4基検出され、うち中世3基と平安時代1基である。溝は、中世のもの1条が検出されている。昭和54年度発掘調査においては、溝8条が検出され、うち古墳時代5条と中世3条である。古墳時代の方形堅穴住居跡5基と円形堅穴1基も検出されている。昭和57年度発掘調査においては、溝13条が検出され、うち古墳時代7条と中世6条である。掘立柱建物1基（東西3間×南北2間）も検出されている。

池上曾根遺跡は、泉大津市曾根から和泉市池上の一帯であるが大部分は和泉市に属するものである。府教育委員会や和泉市教育委員会の調査においては池上遺跡と報告されているが、市教育委員会では曾根・森町を含めた範囲で、池上曾根遺跡と呼んでいる。府教育委員会や大阪文化財センターの調査において、弥生時代第I様式中段階（前期）から第V様式（後期）に至る集落遺跡「池上弥生ムラ」であることが解明されている。縄文時代後期と晩期に属する土器片や第I様式中段階の遺物や、遺跡の中心部において第I様式新段階の遺構や遺物が少し検出されている事から、前期においては集落の規模は小さかったと思われる。第III様式の時期に集落の規模が一番拡大化されており、集落を囲む人工溝の東側と南側に方形周溝墓群が形成されている。また古墳時代の庄内並行期や布留式の土師器または須恵器、奈良時代の土師器甕、平安時代の土師器杯や黒色土器高台付の杯（椀）、鎌倉時代の瓦器椀の出土がある。また、曾根神社の南約20mの地点を府教育委員会が調査した結果、第1遺構面（中世）から曲物井筒井戸1基と時期不明の素掘りの井戸1基と溝が検出された。曲物井筒井戸内からは、土師質小皿7枚・瓦器椀2個・つちのこ状木製品・赤漆塗り木椀片、それに墨書きが出土している。時期は13世紀後葉の遺物である。これらからは、池上曾根遺跡における弥生時代から鎌倉時代までの時代の流れをうかがうことができる。

助松遺跡は、大正時代の道路工事中に、弥生土器の壺や古墳時代の須恵器甕が発見された。市教育委員会の試掘調査は現在も行なわれているが、遺物の出土もなく解明が困難な遺跡の一つである。

大岡遺跡は、泉大津市内の北東地区に位置して、和泉市・高石市におよぶ遺跡であるが、大半は高石市が占めている。旧石器時代後期の網状剥片1点、縄文時代晩期と推定される石鏟1点、弥生時代と推定される石鏟2点の出土がある。旧石器時代終末期から縄文時代草創期にかけての、

有舌尖頭期の出土も1点ある。弥生時代の第V様式に伴う壺で口縁に波状文や円形浮文を貼り付けた土器片や古墳時代の須恵器の出土があり、また6世紀後半と思われる2間×2間の「倉」の掘立柱建物1棟が検出されている。また以前の調査においても、5世紀後半から6世紀後半の古墳時代の掘立柱建物群、奈良時代・平安時代の掘立柱建物、鎌倉時代に属する溝が検出されている。

穴師薬師寺跡は、宝亀年間（約1200年前）に小津の浜に木像の薬師如来が流れつき、人々は当地に堂を建てて安置した。約1000年前に薬師寺となり規模も大きくなつたが、1585年豊臣秀吉の根来征伐の際焼失した。江戸時代に再建されたが、明治8年穴師小学校の建設にともない廃寺となつた。明治21年に再び小堂が建てられたが、それも廃せられ、最近薬師堂が近くに建立された。穴師小学校校舎改築の際、基壇が保存された。

豈中遺跡内には、「大福寺」「小寺」という小字名が残つておらず、現在記録的には何も残っていないが、「大福寺」地区から平安時代末・中世の瓦や中世の土師質皿・瓦質羽釜の出土が⁹、寺の存在と結びつく可能性がある。現在この地区においての調査が行なわれていないので、確認はできていないが、今後の発掘調査に期待したい。「小寺」の小字名の地区から骨壺の出土がある。

極楽寺跡は、記録的には全く残されていないが、奈良時代よりかなり古い時期に創立した、下泉郷における最大の寺院と推測される。境内の位置は、現在の旭小学校を中心とするものである。極楽寺については、本格的な発掘調査がなされていないので、いろいろな疑問点が残っている。旭小学校内には、極楽寺跡の碑が立っている。

泉穴師神社は白鳳時代の創建であり、和泉5社の第2社で、延喜式内社に列し、承和9年に從五位下、貞觀10年に從四位下を授けられている。本殿の西側に位置する摂社住吉神社本殿は、府下最古の神社本殿遺構であり、その建築様式も向拝軒唐破風をつけるなど、注目されている。棟札には文永10年の墨書きがあり、建立年代が明らかである。

(満留)

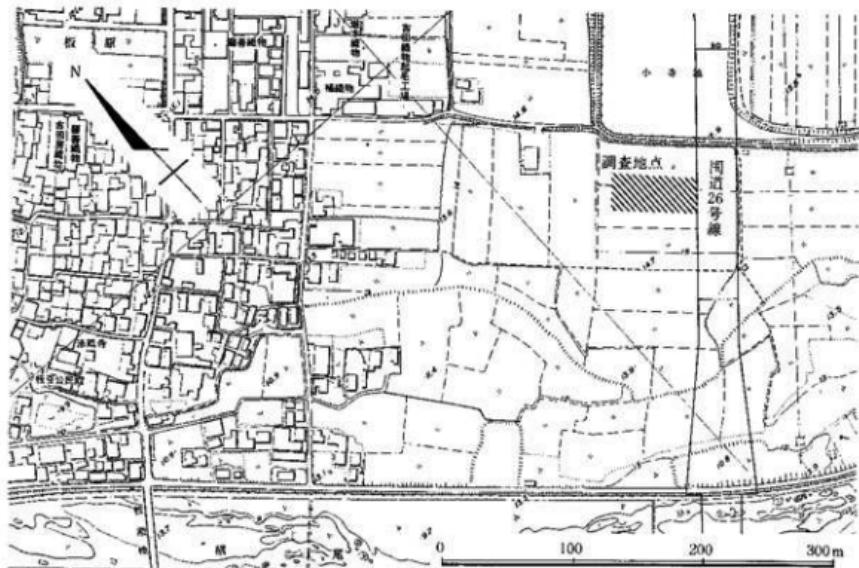
第3章 発掘調査報告

第1節 板原遺跡

1 調査に至る経過（第3図）

泉大津市板原地区は、土地区画整理事業が実施され、第2阪和国道（現国道26号線）も開通し、整然と縱横に走る街路に沿って新しく開発が行なわれようとしている地区である。しかし、それより以前は、日立った道路もなく、条里施行の跡を示す水田が存在するのみであった。その地下には、3000年以上も昔の縄文時代より人々が生活を営んでいた証としての遺構や遺物が埋もれており、泉大津市内でも最も古い遺跡として知られているところである。

以上のような土地で、倉庫建設の計画が土地所有者によりなされ、事前に協議の結果、工事に先立ち調査を実施したものである。(坂口)



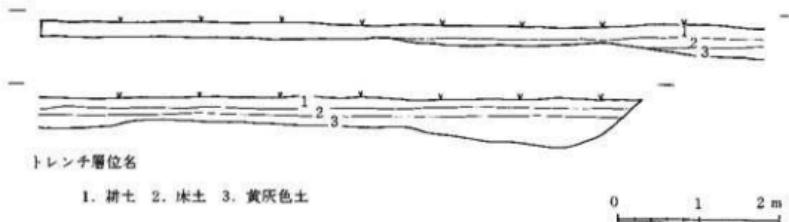
第3図 板原遺跡調査地点図

2 調査結果（板原16-17）

倉庫建設に先立つ調査である。調査地点の面積は949m²である。

調査地点の南東部分に、南東側より幅約1mで、長さ約16m50のトレンチを重機により1本もうけ、北壁の断面観察を行った。層序は、上層より耕土約20cm、床上約10cmで黄灰色土となる。この黄灰色土内より、古墳時代の土師器片が少量検出されたため、黄灰色土面の一部を人力により削平し、遺構の検出を行ったが、遺構の検出はできなかった。また黄灰色土を少し削平して、同様に遺構の検出を行ったが検出はできなかった。黄灰色土内出土の土師器片は、古墳時代以降の二次堆積によるものと判断して、以上をもって調査を終了した。

（楠山）



第4図 板原遺跡トレンチ断面図

第2節 池浦遺跡

1 調査に至る経過（第5図）

弥生時代前期中段階の集落として、池浦遺跡が知られているが、その規模はさほど大きくないうよう、現在の泉大津市立病院東端から東へ約500mの部分にかけてのみ、その時期の遺物が見られる。その次に現われるのは古墳時代で、既往の調査によると、砂利層や、低湿地が確認されており、その中に須恵器や土師器を包含する。又付近の水田には、須恵器や土師器の破片が散布し、その範囲はおよそ800m×400mと広範囲にわたる。

今回調査を実施したのは、遺跡の東部にあたる部分で、工場用倉庫が建設されることになり、土地所有者と協議の結果、工事に先立ち調査を行った次第である。

（坂口）



第5図 池浦遺跡調査地点図

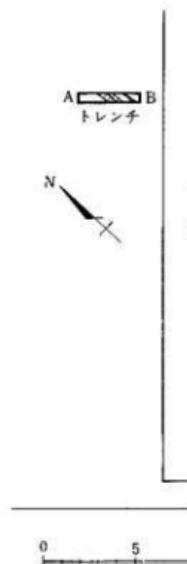
2 調査結果（池浦町5丁目206-5）

工場用倉庫建設に先立つ調査である。倉庫建物面積は458m²である。

倉庫建設用地内において、道路から北東へ約44m20入ったところに、北西側から南東方向に、幅約80cmで、長さ約6m40のトレンチを重機により1本もうけて調査を行った。

まず、トレンチの北壁の断面観察を行った結果、層序は、上層より盛土約16~20cm、耕土約10cm、床土約10cm、暗灰褐色粘質土約50cmで、灰黄色粘砂土となる。床土の下に部分的ではあるが、暗灰褐色細砂混り上約6cm、また、暗灰褐色粘質土の下部で、暗灰褐色砂質土約10cmが確認できた。しかし、これらの層からは、遺構・遺物の検出はなかった。

灰黄色粘砂土上を、北西側から人力により、約1cm程度削平を行ったが、遺構は検出できなかった。同様に、暗灰褐色砂質土を削平した結果、北壁際で北西側より約2m、南壁際で北西側より約3mのところで、黄茶色粘質土を確認した。この黄茶色粘質土面で、北西側より約4mの南壁際で、弥生中期の變形土器を検出した。變形土器(1)は、弥生第Ⅲ~Ⅳ様式のものである。わずかではあるが垂直する頭部を持ち、口縁部は外反しながら拡張して、外方向に面を持つ。端部は



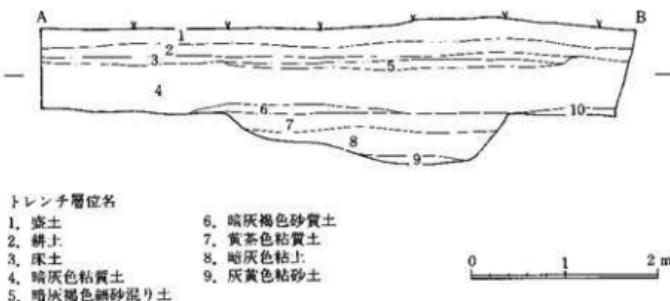
第6図 池浦遺跡調査位置略図

上方にやや膨らみを有する。胴部はそれほどの膨らみはみられないが、丸味を帯びる。胴部径は口径より広い。胴部の外面にはタテハケ目が残り、スヌの付着が少しみられる。

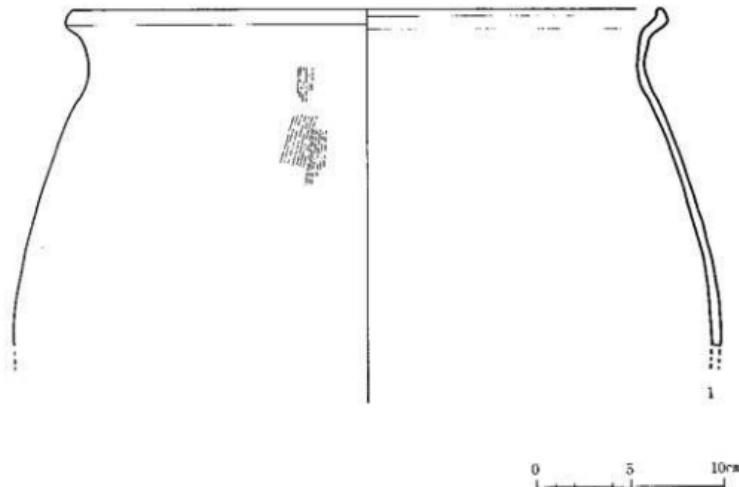
その後、黄茶色粘質土を人力により掘削した結果、この層より同時期の彫形土器の胴部片を検出する事ができた。

さらに掘削を行い、黄茶色粘質土約20cm、黄灰色粘質土約10~30cmで、暗灰色粘土となる3層を確認し、3層を掘削の結果、南北に流路を持つ、その幅約2m、深さ約60cm余りで、西側にテラス状部分がみられるゆるやかな斜面、東側は急な斜面の溝である事が判明した。なお、黄灰色粘質土・暗灰色粘土の2層からは遺物の出土はなかった。

溝上層の出土遺物からみて、この溝は弥生中期頃に属すると思われる。灰黄色粘砂土上に、この溝と同時期に属する遺構の存在する可能性もあるが、溝上層内の遺物は、溝が埋没する時に、上流より流されてきた可能性もあり、弥生中期頃またはそれ以前から存在していたこの溝が、弥生中期頃まもなく埋没したと推測される。以上をもって一応調査を終了した。



第7図 池浦遺跡トレンチ断面図



第8図 池浦遺跡出土遺物

〈補足〉

今回の調査地を含めた周辺一帯は、池浦遺跡の範囲内として、発掘調査が行なわれている。この調査地は、池浦遺跡の弥生時代前期中段階における、中心集落と推定される場所より、約400m余り南東に位置している。池浦遺跡の従来の発掘調査において、中期に至り、集落規模は縮少されるものと考えられている。もし仮に、出土した弥生第III～IV様式の変形土器(1)が、池浦遺跡の中期に伴う遺物であるとするならば、中期（第III～IV様式）の時期において、このあたりまで範囲が広がりを見せるともいえなくない。従来の発掘調査どうり集落規模が縮少されるのであれば、中期において、この調査地を中心とした、池浦遺跡と異なる集落が存在するのか。調査面積が狭く、出土遺物も少ないので一概にもいえないものであるが、今後の調査で解明していきたい。

検出した溝の上流地域には、穴師小学校校庭遺跡（弥生中期の壺椎出土）や、虫取遺跡があり、これら遺跡と関連ある可能性があり、これら遺跡から流された二次堆積によるものと考えるのが妥当であろう。

（袖山）

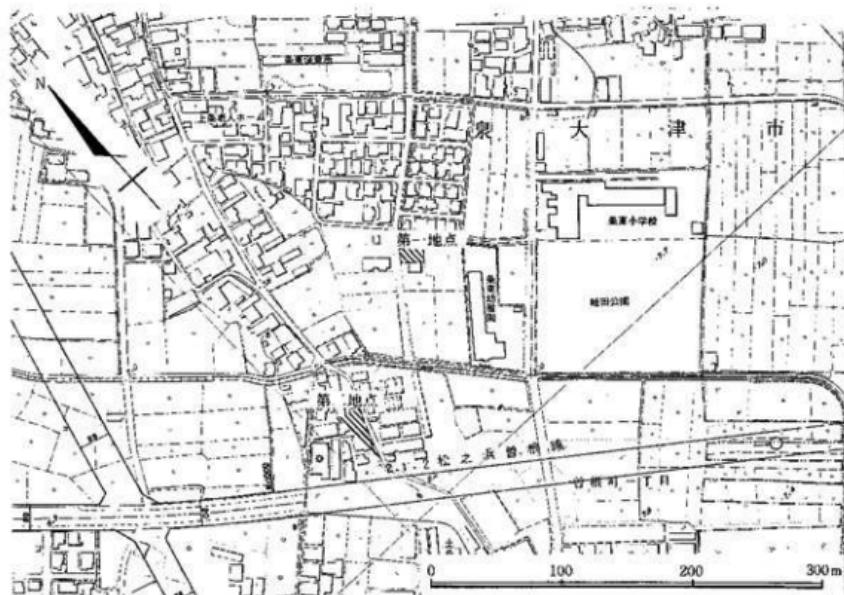
第3節 池上・曾根遺跡

1 調査に至る経過（第9図）

池上・曾根遺跡は、古く明治時代より、石鏃や土器片の出土することで知られていたが、本格的な調査が実施されたのは、昭和44年～46年にかけての第2阪和国道建設に先立っての調査からである。その成果は、かねてから言われていた弥生時代集落の認識を更に大きくうわまわるものであり、その生成から発展への過程及び古墳時代集落への移向の様子を明らかにした非常に重要な遺跡であることを我々におしめた。それによって、昭和51年4月には、国の史跡に指定され、徐々に公有化が進められている。又その周辺部においても、毎年発掘調査が行なわれ、遺跡の様子がよりあきらかになりつつある。

今回この遺跡内において住宅建設の計画がなされ、工事に先立って調査を実施したものである。

（坂口）



第9図 池上・曾根遺跡調査地点図

2 調査結果

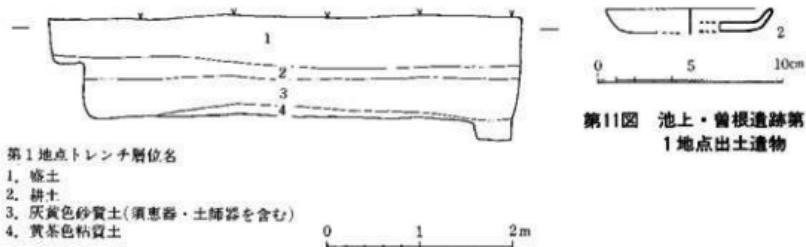
第1地點（森町2丁目225-2～-4、226-4～-6）

住宅建設に先立つ調査である。調査地点の面積は155.68m²である。

調査地点の南西部分に、幅約1mで長さ約5mのトレンチを重機により1本もうけて、断面観察を行った。層序は、上層より盛土約50cm、耕土約10cm～20cm、灰黄色砂質土約40cmで、黄茶色砂質土となる。

灰黄色砂質土から古墳時代の須恵器片、土師器片が出土しているが、上師質皿(2)の破片が上層で検出されており、この層の堆積は古墳時代と必ずしも考えられない。砂質土でもあり、二次堆積による可能性が強く、また断面において、ピットの検出もなく、以上をもって調査を終了した。

出土遺物2は、平らな底部から外上方へ立ちあがる口縁部を持ち、端部は丸く整えられている。底部の厚さは約5mmである。（楠山）



第10図 池上・曾根遺跡第1地点トレンチ断面図

第2地點（森町2丁目207-2）

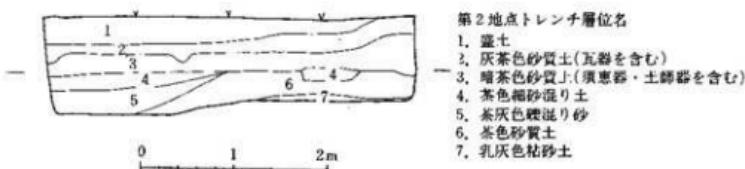
仓库建設に先立つ調査である。調査地点の面積は277.78m²である。

調査地点の南隅に、幅約1mで、長さ約4mのトレンチを重機により1本もうけて、北壁の断面観察を行った。トレンチの南西部分の層序は、上層より盛土約30cm、灰茶色砂質土約20cm、暗茶色砂質土約25cm、茶色細砂混り土約20cmで、茶灰色砂混り土となる。北東部分の層序は、盛土がなくして灰茶色砂質土約20cm、暗茶色砂質土約40cm、茶色砂質土約30cmで、乳灰色粘砂土となる。

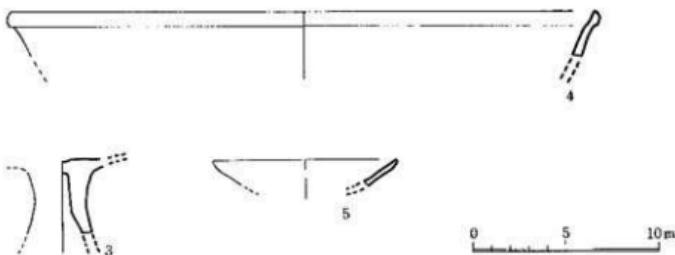
灰黄色砂質土からは瓦器片や土師質器片が出土し、暗茶色砂質土からは土師器片や須恵器片（杯・甕・高杯）が出土した。いづれも二次堆積によるものと思われるが、灰黄色砂質土については、中世頃の堆積、暗茶色砂質土については、古墳時代頃の堆積と推測できる。以上をもって、

調査を終了した。

出土遺物3は、古墳時代の須恵器高杯の脚部である。4は、中世の土師質練鉢である。口縁部は三角形状に膨らみ、端部は上方につまみあげられている。5は、瓦器皿の口縁片である。口縁部はゆるやかなカーブを描きながら立ちあがり、端部は丸く整えられている。
(楠山)



第12図 池上・曾根遺跡第2地点トレンチ
断面図



第13図 池上・曾根遺跡第2地点出土遺物

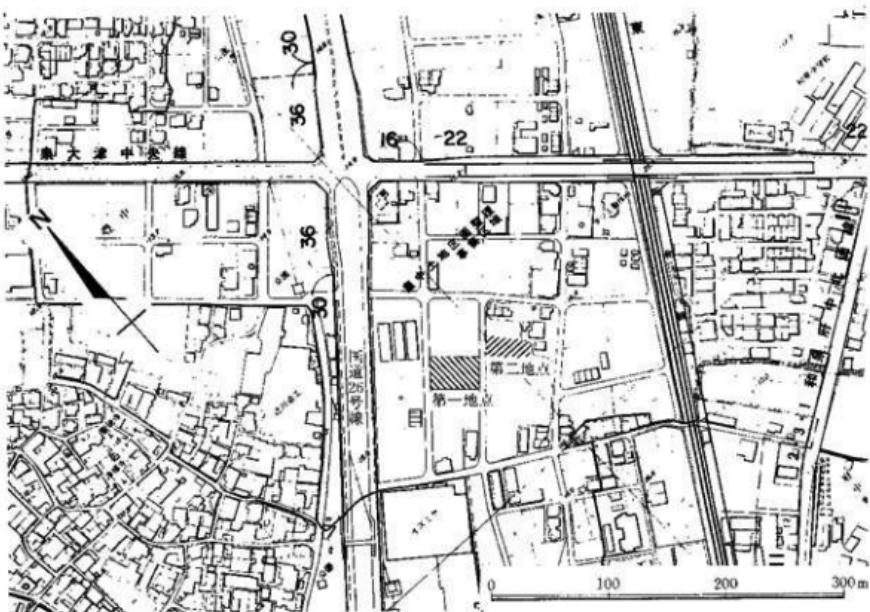
第4節 豊中遺跡

1 調査に至る経過 (第14図)

泉大津市豊中及び東豐中町に所在する豊中遺跡は、現在までに市内で最も数多くの発掘調査が実施されている遺跡である。その調査の結果は次のとおりである。

まず縄文時代中期後半の土器が砂礫層内より発見されている。この層内上部には、土師器や須恵器が含まれており、長期間流水路（河川）であったことをうかがわせる。ついでその周辺部より、古墳時代の集落跡が確認されている。集落は、竪穴住居と掘立柱建物とで構成されており、その数はあまり多くなく数棟単位であったと思われる。このような集落が数ヶ所にある。つぎに平安時代中頃の井戸、そして鎌倉時代から室町時代に属する井戸等が検出されている。

今回、この遺跡内において、宅地開発が計画され、これに先立ち調査を実施したものである。(坂口)



第14図 豊中遺跡調査地点図

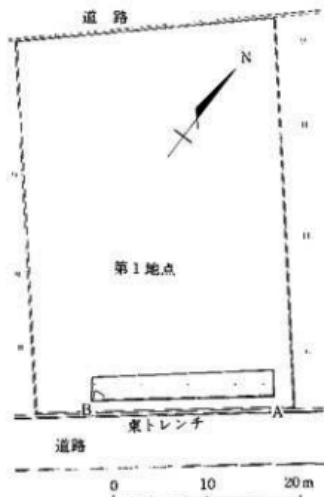
2 調査結果

第 1 地 点 (東豊中町 2丁目 979-7)

遺構 (第15・16・17図)

土地所有者八木孝雄氏より住宅建設の計画がなされ、「土木工事等による埋蔵文化財包蔵地の発掘届」が提出された。市教委は、当該地が豊中遺跡に属するので、八木氏と協議の結果、事前に発掘調査を実施することになった。

敷地内の東側部に、幅2m70、長さ19m50、面積52.65m²の規模の調査区を設定し、重機により耕土を除去した。その後人力による掘削を行ない、以下に述べる成果が得られた。

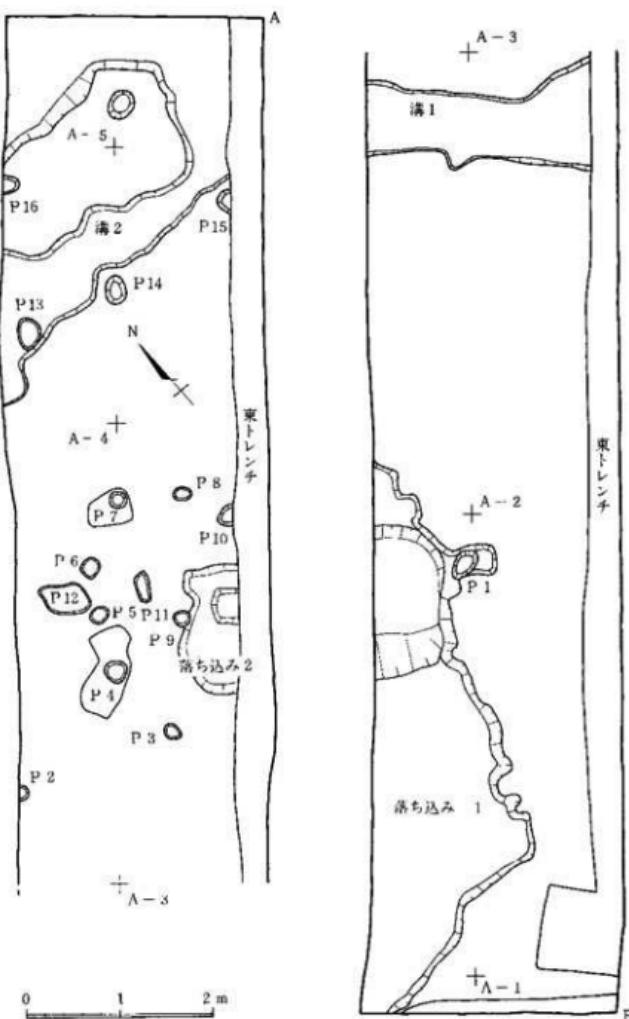


第15図 豊中遺跡第1地点調査位置図

北側部分で、耕土及び、明灰色小礫混り土を除去すると、茶色礫混り砂が見られたが、大半の部分は粘質土で、この面において清(2条)、落ち込み(2ヵ所)、ピット(17箇)が検出された。

溝1

調査区のはば中央部に位置し、南東一北西方向の深みをもつ。その規模は、幅65cm~125cm、深さ約5cmで、上流部と下流部の比高差は、ほとんど認められない。堆積土は上層と同じ明灰色粘質土で遺物は検出されなか



第16図 豊中遺跡 第1地点造構図

った。この遺構は、溝といったはっきりしたものでなく、断面にもはっきりとはあらわれておらず、むしろ溝様の遺構とする方が良いだろう。

溝2 調査区の北部に位置し、東～西方向の流路をもつ。幅は、調査区の外側へ伸びるため不明、深さ5cm～10cmの中は島状に粘質土が盛りあがる。堆積土は小礫混り明灰色土で、溝底となる礫混り茶色砂質土からは土師器片(6)や須恵器片が出土している。古墳時代に属する。

落ち込み1 調査区の南部で西側部に位置する。規模は調査区外にひろがるため不明であるが2m×2m×4mを確認した。深さ約2cm～4cm、北よりに半径約90cmの大きさで更に約10cm程深くなる。堆積土は上層が茶色粘質土、下層が暗茶灰色粘土で、遺物は検出されなかった。

落ち込み2 溝1の北側で東よりに位置する。半径約70cmであるが、不整形な形をする。深さ5cm～7cmで底部で更に4cm程深くなる。調査区外にひろがるので全体形は不明である。堆積土は小礫混り黄褐色粘質土で、遺物は出土しなかった。

ピット 総数17箇が発見された。直径はほぼ20cm～30cmであるが、P4・7・12はやや大きく形も不整形である。深さは5cm～9cmの範囲内におさまるが、P7・14は20cmを越す。出土遺物はなく、用途は不明であるが、P14・15・16・17は、その相互の位置から掘立柱建物となる可能性もある。古墳時代のものと考えられる。参考までに第3表を載せておく。上記遺構確認後東側部分にトレーナーを掘削し、その断面は第17図に図示しておく。

表3 掘立柱建物ピット一覧表

	直 径	深 さ	埋 土	出 土 遺 物
P 14	25.8	8.1	礫混り茶色細砂土	な し
P 15	29.5	7.2	礫混り茶色細砂土	な し
P 16	25.8	5.5	礫混り茶色細砂土	な し
P 17	28.6	8.2	礫混り茶色細砂土	な し

小まとめ

調査区が狭いため、はっきりした遺構はつかめなかつたが、付近には古墳時代の堅穴住居址や掘立柱建築物址が発見されており、この地域は、その集落の外側部で、やや低い土地で、5世紀～6世紀頃以降に砂礫等が堆積し、その中に遺物が含まれるものと思われる。 (坂口)



第17図 豊中遺跡第1地点断面図

遺物（第18図）

出土遺物は、古墳時代の土師器の高杯、須恵器の杯蓋、杯身と、土師器の壺・壺の破片、須恵器の破片である。出土の遺物は量的に少なく、それも北地区の礫混り茶色砂質土に集中している。なお、東トレンチ礫混り茶色砂質土は、溝2の礫混り茶色砂質土と統くものである。

原則として器種別に分類し、個々の法量、胎土、色調、調整、出土場所（層）、焼成については遺物観察表に示した。

(1) 土師器

高杯（6）

6は高杯の杯部と脚部の、接合部分の破片である。脚部は厚手で、棒状のものを芯にして、それに粘土を巻きつけたものである。布帽式に属するものである。

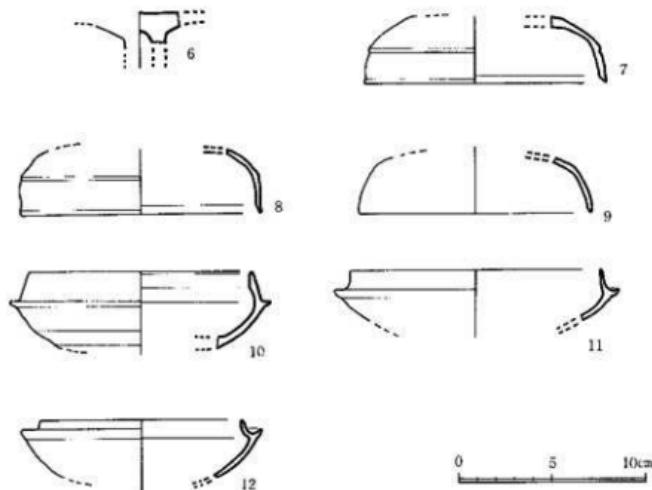
(2) 須恵器

杯蓋（7～9）

7は天井部と口縁部との境に、稜というよりは、沈線を一条めぐらす事によって、稜を浮かびあがらせている。口縁端部がやや外反している。8は天井部と口縁部との境に鈍い棱と段が認められる。口縁部は内傾するが端部はやや外反している。7・8は第II型式3段階である。9は口径が狭く小型化している。口縁部は丸く整えられている。第II型式4段階である。

杯身（10～12）

10は立ちあがり高が長く内側に入り、受部は外方向に平らに延びる。受部と底部との間に段が認められる。第II型式1段階である。11は立ちあがり高がやや長くまっすぐにたつ。受部は短くやや上向きに延びる。第II型式4段階である。12は立ちあがり高が短く内傾している。受部は比較的長く、やや上向きに延びる。第II型式5段階である。



第18図 豊中遺跡第1地点出土遺物

なお、須恵器杯蓋・身の型式・段階については、「陶邑II」(大阪府教育委員会 1977年3月)、を参考にした。
(小林)

第2地點（東豊中町2丁目963-6,8）

遺構（第19・20・21図）

上地所有者中村武雄氏より盛土工事の計画がなされ、「土木工事等による埋蔵文化財包蔵地の発掘届」が提出された。市教委は、当該地が豊中遺跡に属するので、同氏と協議の結果、事前に発掘調査を実施することにした。

先ず重機により敷地内を「コ」の字形に掘削し、人力にて床面を削平した結果、耕土下約20cm

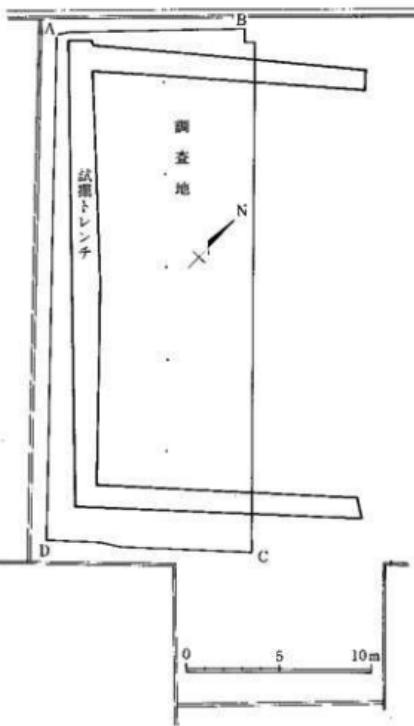
で、砂利層を伴う溝を確認した。これにより、あらためて、調査範囲をひろげ（28m×11m）、再度調査を実施することになった。

調査面積は308m²で、重機にて、耕土及び床土を除去後人力による掘削を行った。その結果、溝がほぼ平行して2条検出された。

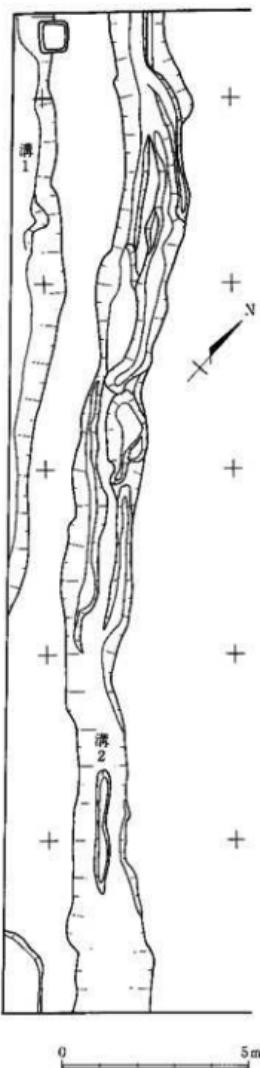
溝1 調査区の北西部に、南東一北西方向の流路をもつ溝で、幅は調査区外にひろがるため不明であるが、深さは27cm以上、確認した長さは17mである。灰黄色土をベースに、灰茶色荒砂が堆積しており、

出土遺物には、土器（18・20）と須恵器（31）がある。

溝2 溝1 の北東隣りに、調査区を縦断する位置にある。幅は1m 50~2m、深さ15cm~25cmで、底部は複雑な形になっている。流路は溝1と同様南東一北西方向である。灰黄色土を肩に灰黄色荒砂が堆積しており、



第19図 豊中遺跡 第2地点調査位置図



第20図 豊中遺跡 第2地点造構図

遺物には、土師器（13・14・15・16・17・22）、須恵器（23・33）砥石（37）などがある。



第21図 墓中遺跡 第2地点断面図

小まとめ

当該地からは、集落跡を想定させる遺構は検出されなかった。しかし付近には建物跡が発見されているため、住居地の側を溝が流れていたことになる。その時期は古墳時代である。（坂口）

遺 物（第22・23図）

出土遺物は、古墳時代の土師器、須恵器、平安時代の土師質高盤、それに砥石である。

原則として器種別に分類し、個々の法量、胎土、色調、調整、出土場所（層）、焼成については遺物観察表に示した。

(1) 土師器

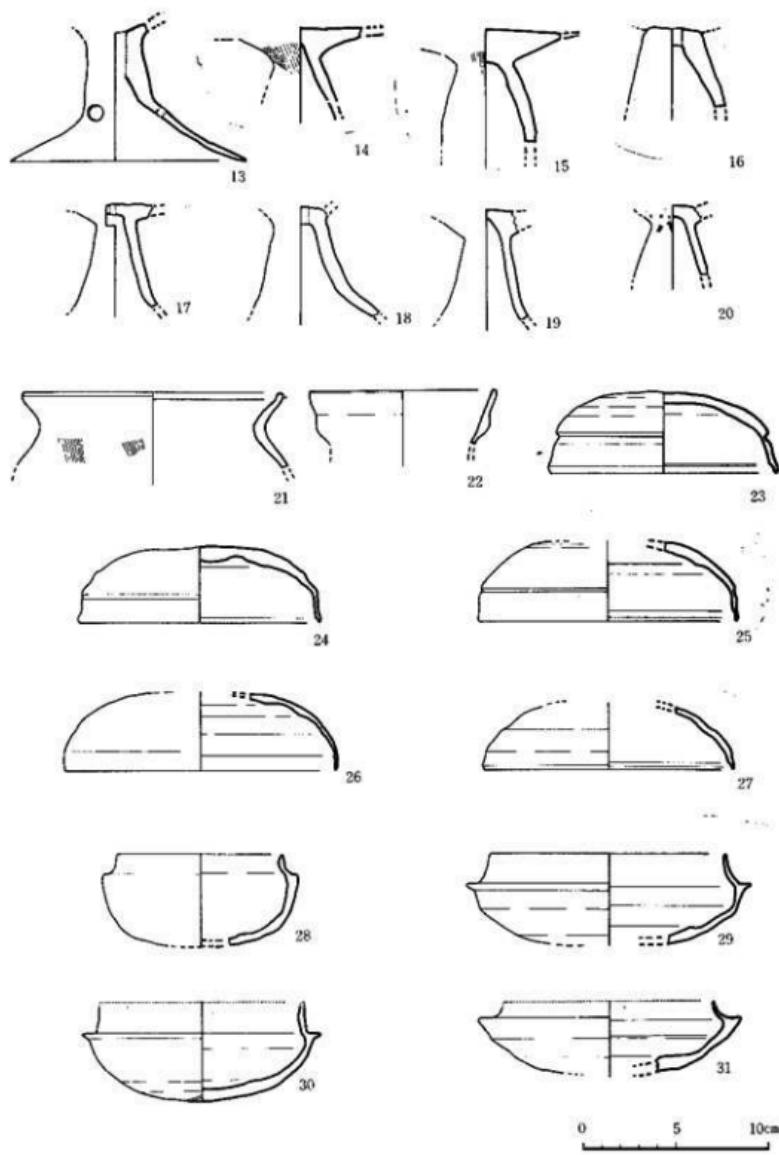
高杯（13～20）

13は杯部が破欠していて形は不明であるが、脚部は柱状部と柄部に分かれるもので、柄部は大きく広がる。柱状部と裾部の境に、直徑約9mmの円孔があり、三方にあけられている。柱状部内側に、しばりの跡が残り、外側は剥離のため調整はやや不明であるが、タテ方向のヘラ磨きが施されていたと思われる。布留式傾向の時期に属するが、弥生第V様式の伝統を受け継ぎ、布留式傾向でも比較的庄内式傾向に近いものである。14～20は完形品がないため形は不明であるが、布留式傾向に属すると思われるが、中には庄内式の影響を受けているものも含まれていると思われる。

壺（21）

口縁部は内湾気味にたちあがり、端部はやや内側につまみあげられて、丸く整えられている。布留式傾向に属するものである。

壺（22）



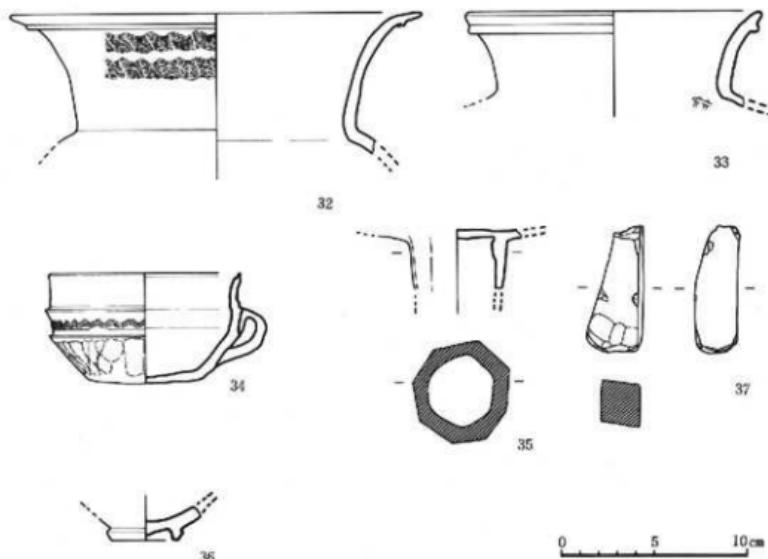
第22図 龍中遺跡 第2地点出土遺物

口縁部の外側が膨らみをもち、端部はやや丸く整えられている。小型三種土器の小型丸底土器に分類されるものと思われるが、口縁部の広がりが小さく、口径よりも胴部径が最大となると思われる。

(2)須恵器

杯蓋 (23~27)

23は天井部と口縁部との境に、鋸いが後のみられるもので、天井部が丸みをもち、口縁部はわ



第23図 豊中遺跡 第2地点出土遺物

すかに広がり、口縁部に至り外反する。24は天井部と口縁部との境が、形態化し殆んどみられないが、わずかに沈線がめぐる。天井部はわずかに丸みをもち、口縁端部が外反している。25は天井部と口縁部との境に、沈線がめぐり、口縁部は広がりをみせず、口縁端部も外反しない。23~25は第II型式3段階である。26は天井部と口縁部の境に、稜および沈線がみられないものである。全体に丸みを帯びている。第II型式4段階である。27は天井部と口縁部の境がまったくみられず、器高も低く、口縁部が大きく広がりをみせる。第II型式5段階に属するものと思われる。

杯身（28~31）

28は器形的には、体部は丸みを帯びていて深い。底部もやや丸みを帯びる。体底部は回転ヘラ削りにより、ほぼ平らに整形されている。口縁部は短かく、やや内側に膨らみ、内傾しながら端部に至り外反する。口縁部と体部の境にある段が、受部の役割をしている。第Ⅰ型式2段階の時期に属するものである。29は、たちあがりがやや低くなり、口縁部が広く、器形的には平たい。受部はやや上方を向き、短かく端部は丸い。第Ⅱ型式1段階である。30はたちあがりは比較的に高く、やや内傾している。受部は短かく、横方向にのびて、端部は丸い。底部は丸く、回転ヘラ削りによる。底部にヘラ先で線が刻まれている。第Ⅰ型式5段階である。31は器高が低くなり、たちあがりも退化しつつある。受部は厚手で短かくやや上方向につまみあげられている。底部はヘラ切り未調整である。第Ⅱ型式5段階である。

甕（32・33）

32は口縁部が比較的長く外反し、口縁端部に至り外方へ延び、やや先細りである。外面に突帯が巡り、口縁部に2条の波状文がある。33は口縁部は短かく、口縁端部は丸味を帯びる。外面に突帯が巡るが、口縁部には文様は施されていない。体部内面に円弧タタキが残る。32・33は第Ⅰ型式1段階の時期に属するものである。

把手付椀（34）

口縁はやや外反し、端部で上外方に屈曲している。体部には2条の沈線がありその間に1条4本の波状文を配しており、紐状にした粘土を把手としてはりつけている。外面底部は、不整方向の静止ヘラ削り調整で、底部は凹凸面を残すが、平らで安定性がある。外面底体部は、手持ちタテヘラ削りのうえヨコヘラ削りを行っている。第Ⅰ型式1段階の時期に属するものである。⁹

土師質高盤（35）

面とりの高杯（高い脚を持つ盤）、土師質の高盤である。脚部の筒状部外面を、縱に大きくヘラで削り、面とりをしている。面は8面である。筒状部の成形は、盤部の裏面中央に、直接粘土紐をまきあげている。接合部分内側に、指押しによる接合がみられる。8世紀から9世紀頃のものである。田中琢氏は、筒状部の成形をa bの2種類の手方に分けている。35はa手法によるものである。¹⁰

陶磁器碗（36）

碗の底部片である。高台は比較的にしっかりした逆台形の削り出しである。精製土を使用し焼く焼かれている。素地は茶褐色で、緻密である。みこみ部分に緑茶色の釉が施されている。

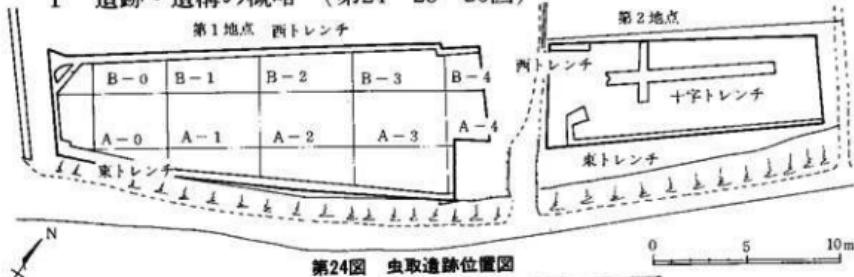
砾石（37）

石質はきめ細かい綠泥片岩である。長方体で、使用面は4面全てで、表面に浅い溝みが認められる。

（楠山）

第5節 虫取遺跡出土遺物

1 遺跡・遺構の概略（第24・25・26図）



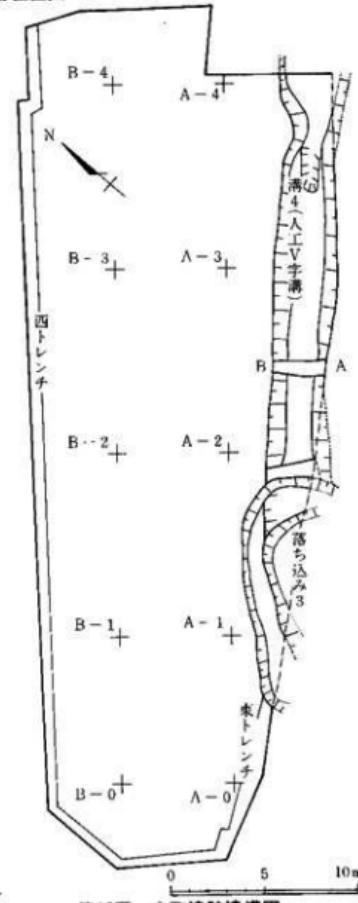
虫取遺跡は、昭和53年に大阪府教育委員会によって、初めての本格的な発掘調査が行なわれている。その結果、縄文晩期の土器片が出土し、また、弥生第I様式新段階を含む土坑や、6世紀後半および10世紀に至る掘立柱建物が検出され、縄文晩期・弥生前期から始まる遺跡として知られるようになった。

昭和54年に市教育委員会により、諸瀬池内の発掘調査が行われたが、遺構・遺物の検出はなかった。

昭和58年に、旧諸瀬池（現在楠小学校）の西側堤防の一部をくずして、開発に先立って市教育委員会が、本格的な発掘調査を実施した。市教育委員会による、虫取遺跡第1次発掘調査である。

この発掘調査の結果、第1地点（我孫子221-4,5・222-2,3）の、堤防の西側際で、弥生前期第I様式新段階の人工V字溝を検出した。また、古墳時代の遺構・遺物も検出した。なお、遺構と一部の遺物については、昭和59年3月に報告済みである。

第1地点の弥生前期人工V字溝の層序は、部分的に異なりを見せるが、上層より茶褐色粘質土、黄茶褐色粘質土、黄茶褐色砂質土、青茶色粘質土、青灰色砂質土である。



第2地点（我孫子223-2）で、中央部において、黄色粘土層まで暗茶色粘質土を削平して十字トレーンチを掘削した結果、黄色粘土層の上面暗茶色粘質土で、縄文後期の中津式～北白川上層式並行期と思われる深鉢の口縁片が出土している。これも含めて今回報告しておく。

なお、人工V字溝出土の弥生前期の土器については、出土量が多い事もあり、整理に時間と有するものであり、次回に報告する事にする。

現在までの虫取遺跡の発掘調査は以上であるが、市教育委員会の調査によって、解明されている虫取遺跡について補っておく。第2地点において、上田町II式の並行の土師器甕、第I型式5段階の須恵器高杯、第II型式1段階ないし2段階の須恵器杯、第IV型式4段階と第V型式の須恵器甕、黒色土器A類の皿が出土している。第3地点（我孫子416-2）においては、奈良時代から平安時代に属する土師質土器、第4地点（我孫子417-2）においては、中世の瓦質練鉢が出土している。なお、第2・3・4地点の遺構・遺物については、昭和59年3月に報告済みである。

これらから見て、総合的ではないにしろ、虫取遺跡は、縄文後期・晚期、弥生前期（第I様式新段階）・中期（第II様式）、古墳時代、奈良、平安、中世に亘る遺跡である事がわかる。

2 縄文後期・晚期の土器（第27図）

出土した縄文土器は、全て細片である。時期的には、後期と晚期の2期に属するものである。後期と晚期に分けて報告しておく。

1 後期

後期出土の細片は3点であり、口縁片である。

深鉢（38~40）

38は太い2本の沈線により、画された磨消縄文である。文様はほぼ直線的である。中津式～北白川上層式の影響を受けた時期に属するものである。39・40は中津式～北白川上層式の時期に類似するものと思われるが、外面は摩滅が激しく、痕跡を残すのみである。

虫取遺跡の東に板原遺跡があり、中津式～福田K II式の要素の土器が出土しているので、38もそれら遺物と同時期と考えてさしつかえがない。

なお、虫取出土で、中津式～北白川上層式の影響を受けた土器を分類上第1群としておいた。



第26図 虫取遺跡溝4断面図

2 晩期

出土した浅鉢・深鉢は、口縁部に突帯を有する時期以後のもの、つまり滋賀里IV式並行期から船橋式（滋賀里V式）並行期・長原式並行期の土器である。形態的に見て4類に分類しておいた。

なお、晩期出土の遺物は第2群とする。

A類

口縁部に突帯を有するが、滋賀里IIIb式の要素をもつものであり、甲乙の2種に区別。滋賀里IIIb式の並行型。

B類

滋賀里IV式の並行型。

C類

船橋式（滋賀里V式）の並行型で、甲乙2種に区別。

D類

長原式の並行型。

なお、分類には、家根祥多氏「近畿地方晩期の編年」⁸を参考にした。

浅鉢

A類乙 (41・42)

41は黒色磨研系で、口縁部が外方向に長く延び、内外に突帯が巡る。口縁端部は凹面をもつ。

42も黒色磨研系で、口縁部が外方向に延びるが短い。内外に突帯を巡らせ、口縁端部は内側につまみあげられ、丸く整えられている。滋賀里IIIb式の要素をもつ土器である。

B類 (43)

43は黒色磨研系であるが、口縁部外面に突帯をもち、滋賀里IV式の深鉢の要素を持つ土器である。

深鉢

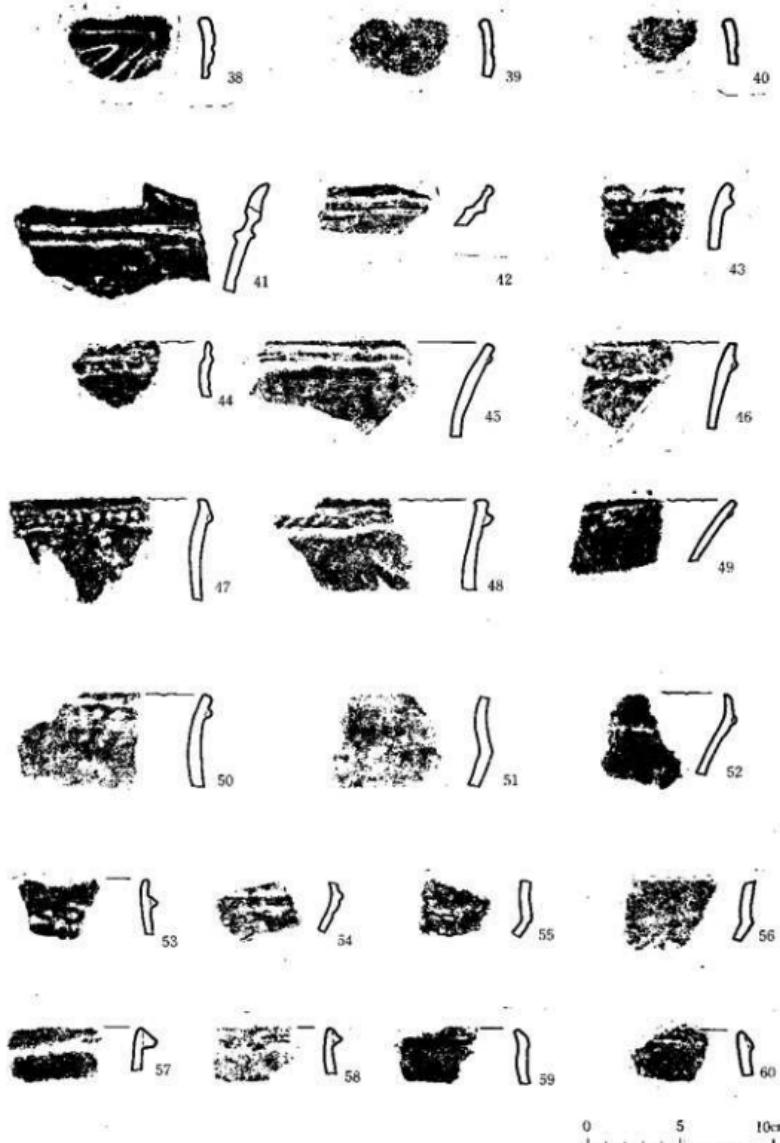
A類甲 (44)

7の口縁端部は丸く整えられており、突帯部と同様に刻み目がある。胴部外面の調整は、原体の細いものによるヨコナデの条痕を残すものである。恩智III類に、同型の出土がある。

B類 (45~51)

45は口縁部がほぼ直立し、口縁端部が平らな面をもち、突帯が口縁部を一周する。口縁端部と突帯部に、刻み目がみられない。46~50は口縁部の傾き、口縁端部の形に若干の異なりがあるが、口縁端部と突帯部に刻み目が見られるものである。50は船橋式の並行型に比較的に近い時期である。

C類甲 (52・53)



第27図 虫取遺跡出土遺物

52は口縁部は直立し、口縁端部が内側につまみあげられ、先が尖っている。口縁端部と突帯部に、刻み目が見られる。53は口縁部が丸く整えられている。

C類乙 (54~56)

54~56は肩部片である。肩部に突帯がないが、沈線により稜を浮びあがらせている。船橋式系に属するとは、かならずしも云えない。

D類 (57~60)

突帯部が口縁端部の近くに張り付けられている。突帯の断面は三角形である。突帯部に刻み目が施されているが、やや間隔がある。

〈補足〉

近畿地域における晩期の土器編年は、滋賀里式・丹治式・樅原式・船橋式の4型式に分類されていたが、その後の滋賀里遺跡や長原遺跡の発掘調査により、滋賀里I式・II式・IIIa式・IIIb式・IV式・船橋式(滋賀里V式)・長原式の7式に細分され、近畿地域における晩期の基本的編年となっている。

虫取遺跡の出土遺物を、この基本的編年にあてはめておいたが、地域差がある事でもあり、大きな矛盾があると思われる。大阪の南地域におけるある程度の編年が確立されたうえで、もう一度再整理を行なっていきたい。虫取遺跡の出土遺物を、今後の再整理時にわかりやすいように、⁸晩期の一覧表を加えておいた。

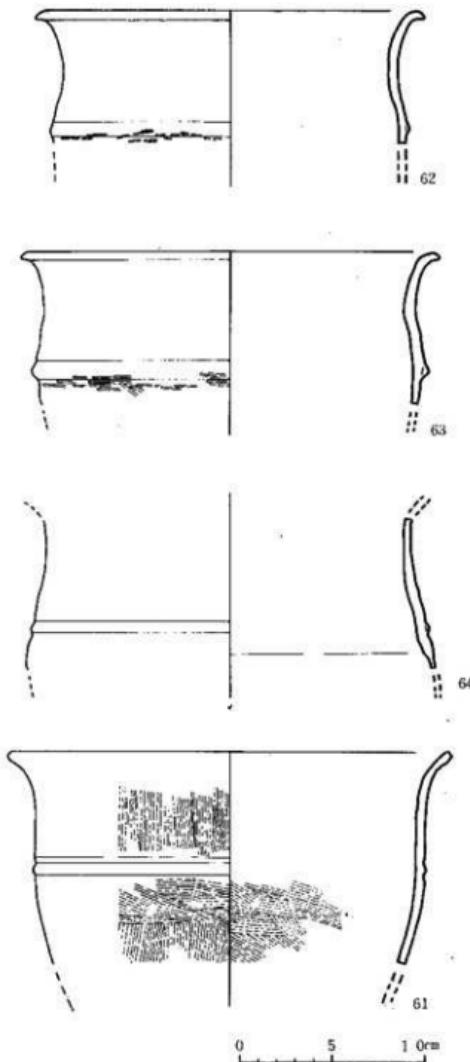
表4 縄文時代晩期の一覧表

基本的編年	森の宮	恩智	虫取	備考
滋賀里I式				
滋賀里II式	森の宮I群	恩智I類 (馬場川)		
滋賀里IIIa式				
滋賀里IIIb式	森の宮II群	恩智II類	第2群 A類	
滋賀里IV式		恩智III類	第2群 B類	突帯の出現
船橋式 (滋賀里V式)	森の宮III群	恩智IV類 (船橋式)	第2群 C類	
長原式			第2群 D類	突帯の退化

3 縄文要素を残す土器（第28図）

■ (61~75)

61は弥生第I様式の要素を取り入れつつある土器である。胴部には、沈線を巡らせることによって、突帯部を浮かびあがらせている。内外面の調整はハケ目である。62・63は口縁部が垂直に立ちあがり、口縁端部に至り、大きく外反する。肩部に突帯部が一周する。外面調整は、口縁部がヨコナデで、突帯部下の胴部はヨコヘラ削りである。64~75は肩部に沈線を巡らせることによって、突帯部を浮かびあがらせている。外面調整は口縁部はタテヘラナデで胴部はヨコヘラ削りである。65~75については、紀伊系（太田黒山式[◎]）と考える特徴をもっているが、きめてにかけている。62・63のタイプと64~75のタイプについて時期差があるのか、同時期と考えていいのか、又タイプ的に異なる土器なのか、今後再考察、再整理を要するものである。



第28図 虫取遺跡出土遺物

4 縄文晚期・弥生前期の石製品（第29・30・31・32・33図）

第1地点において、100個余りのサヌカイト片（石器・石核・剥片を含む）が出土している。それには使用痕のある河原石6個と、使用痕と思われる河原石が多量に出土した。石台と思われる16cm×12cm、厚さ6cm程度の砂岩系の自然石も数点出土している。中には中央部に凹部や線刻がみられ、使用痕とも思われる。

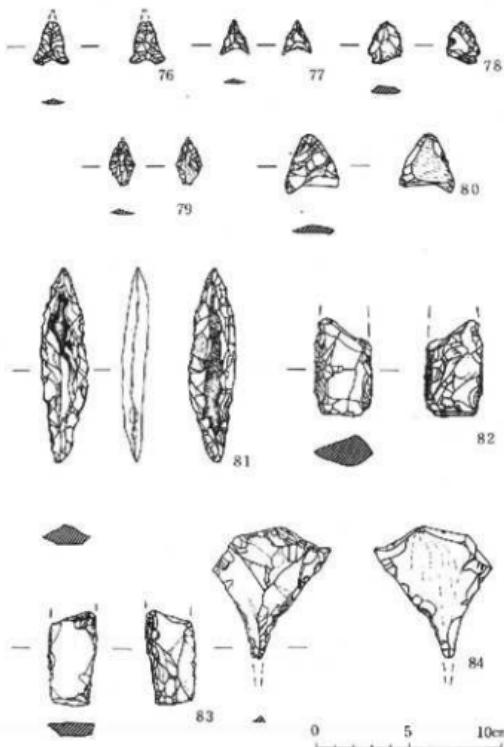
今回報告したサヌカイト・河原石の法量・石材・色調・加工・出土場所（層）・備考は遺物観察表に示した。

石鎌（76～80）

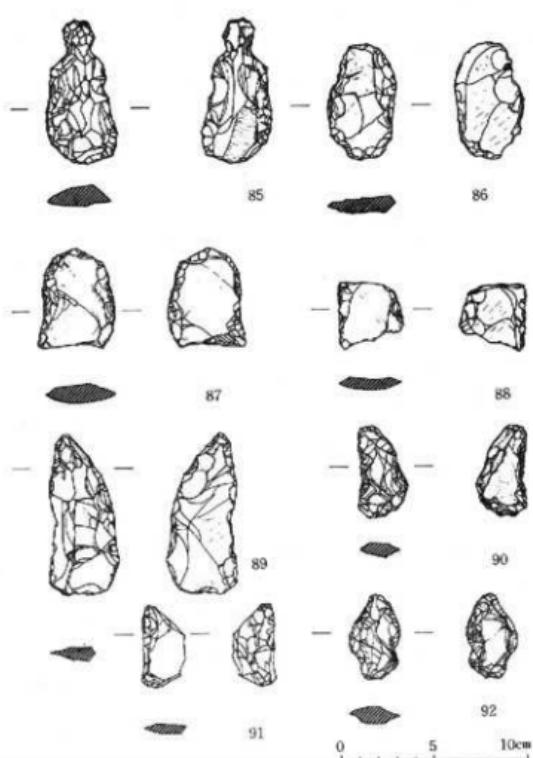
76は縦長の二等辺三角形の剥片を利用し、二辺の片側を細かく加工（剝離調整）し、もう片側はおおまかに加工（剝離）して、刃部を形成している。縄文の要素を残す、凹基無茎式である。

77は二等辺三角形の剥片を利用し、二辺を細かく加工（剝離調整）して、刃部を形成している。凹基無茎式である。78は二等辺三角形の剥片を利用し、二辺をおおまかに加工（剝離）しているが、不定形で未調整品である。

79は木葉形におおまかに加工し、先端部の二辺を細かく加工（剝離調整）している。尖基無茎式である。80は大型の石鎌である。縦最大3.2cmで、横最大2.8cmで、最大厚は0.4cmである。二辺の加工があまり施されておらず、未調整品である。



第29図 虫取遺跡出土遺物



第30図 虫取遺跡出土遺物

石槍 (81-83)

81は両面加工によって断面形が菱形を呈し、先端部（刃部）と基部はともに先細りに細かく加工（剥離調整）している。基部の刃部に、紐で縛りつけるために、2ヶ所に刃溝しが行なわれている。刃溝しは約8mm程度である。82・83は先端部が欠損しているが、82は2辺、83は1辺を細かく加工（剥離調整）している。基部は平らで加工はあまり施されていない。

石錐 (84)

錐部は欠損しているが、不定形の大きな頭部下端に極めて先細りの錐部をもつものである。製作上頭部は、剥離面をそのまま残して、概形をつくるにとどめ、下部を集中して剥離調整して錐部をつくり出す。

石匙 (85)

縦型で、頭部につまみ状突起があるもので、紐で縛り、持ち歩いたものと思われる。用途は削器と同様で、皮剥などのナイフとして使われたと思われる。縦型のものが横型のものより早くからあらわれ、縄文時代をあてることができるが、西日本においては、弥生遺跡でまれに出土することもあり、縄文の伝統を受け継いだ時期の遺物と考えるのが妥当である。石匙の名称であるが、用途から考えて、皮剥石器かもしくは新しい名称に改めるべきであろう。

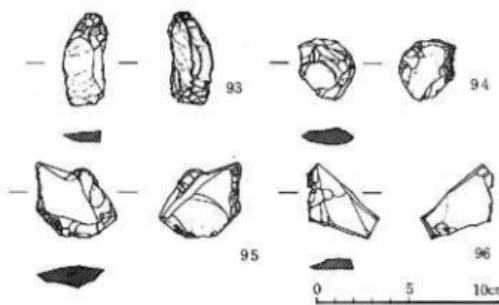
削器 (86-91)

86・87は横形削器である。横形の剥片を素材としている。その横形の剥片は、数回の打撃によ

り剥離され、刃部は二辺で、その両側に細かく加工（細部調整）を施している。88～91は不定形ではあるが、ほぼ横形の剥片を素材としている。その剥片の剥離面はあまり大きくななく、何とかおおまかな剥離調整を行なっていると思われる。刃部はその両側に細かく加工（細部調整）を施している。88については刃部は二辺、89～91については刃部は一辺である。

不定形刃器（92～96）

92・93は横形の剥片を素材としているが、刃部の細部調整がおおまかである。94～96は不定形な剥片を利用し、94・95はその一辺の両側に細かく加工（細部調整）を施して刃づけしている。96はその一辺におおまかな加工（剥離）を行なう事によって刃部をつくっている。



第31図 虫取遺跡出土遺物

石磨丁（97～99）

97は肩部片である。肩部から背部にかけては直線的で、端部に至り、湾曲する。98は刃部の両側を、研磨により直線的な刃縁をつくりだしていたと思われるが、使用が激しくその痕跡を残す。肩部から背部にかけては背面は丸みをもち、形状は湾曲的である。99は刃部の両側を、研磨により直線的な刃縁をつくりだし、刃部後がみられる。肩部から背部にかけても直線的で、端部に至り丸みをもつ。97～99の体部は、全面に研磨が施されている。石材は和歌山県紀ノ川南岸を産出地とする緑色片岩である。

石斧（100）

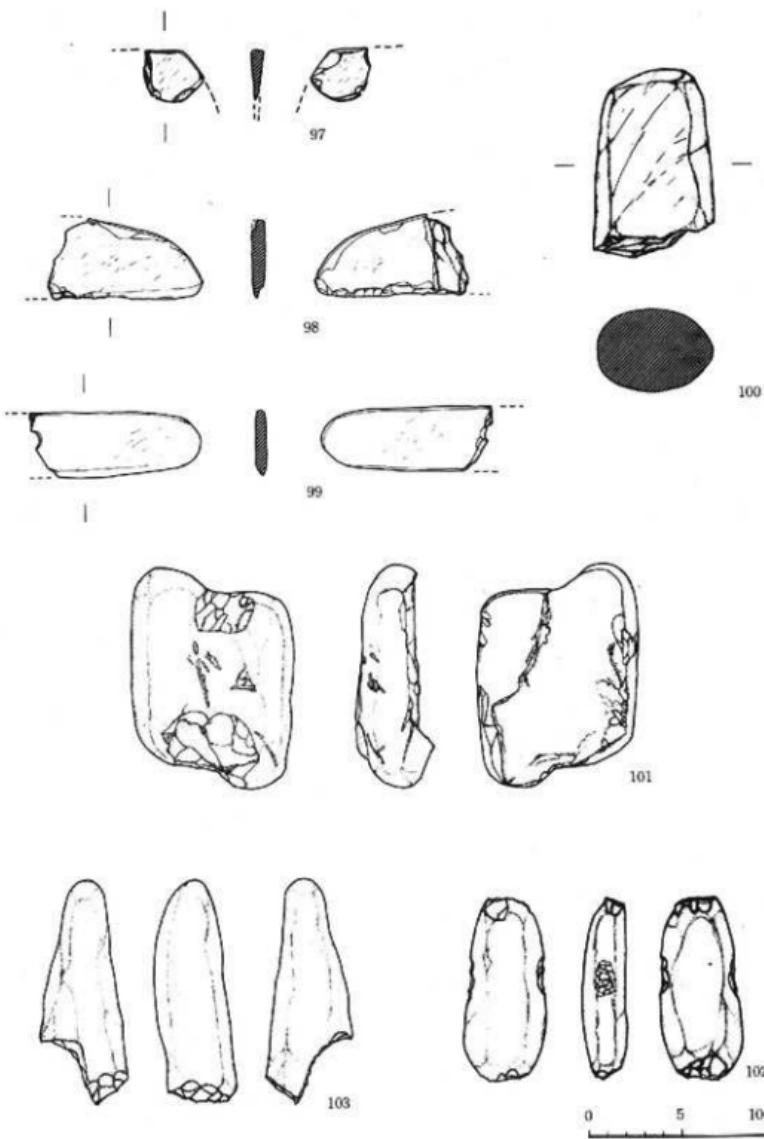
刃部は欠損しており、基部のみである。断面は扁平な梢円球を呈している。外面調整は全面に磨き加工が施されている。大型蛤刃石斧である。

石鎌（101）

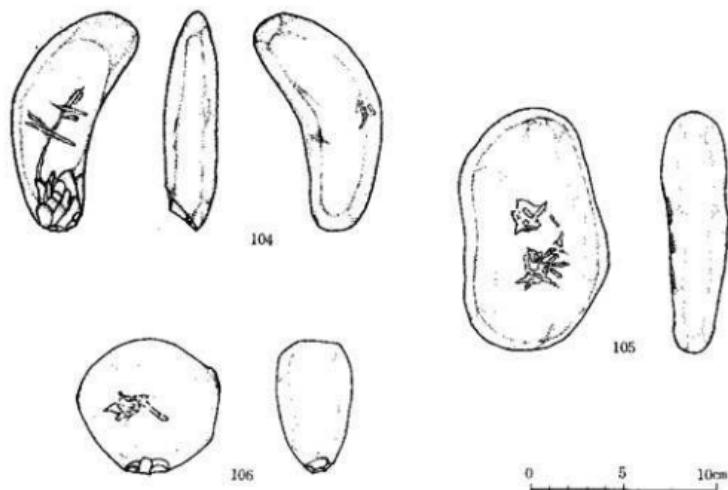
扁平で隅丸の長方体を呈する、目の粗い和泉砂岩の自然石を素材とし、長軸の両端部中央部を打ち欠いている。漁網用の沈子として使用されたものか、また他の目的に使用されたものか、使用目的については、まだ疑問点がある。

敲石（102～104）

長方体の目の粗い和泉砂岩の自然石を素材とし、一方および四方を敲面として使用している。



第32図 虫取遺跡出土遺物



第33図 虫取遺跡出土遺物

102については敲面は四方で103・104については一方である。104については平らな面に打ち欠きによる使用痕が残り、凹石として使用されたと思われる。

凹石（105・106）

扁平で隅丸の目の粗い和泉砂岩の自然石を素材とし、両面に打ち欠きによる使用痕が残る。106については一方に打ち欠きがみられ、敲石として使用された痕跡を残す。

5 小結

調査面積が狭いという事もあって、遺構の範囲・集落の規模（弥生前期に属すると考えられているが、古墳時代前期の落ち込みや約70余りのピットも検出されているので、その時期の集落の規模についても検討しなければならない）については、なお不明である。第1地点の人工V字溝からコンテナ約80箱という第I様式新段階の土器が出土している点から見て、弥生第I様式新段階の時期が、虫取遺跡のピークで、中期になって、なんらかの原因（自然的環境・人為的環境によるものか）によって衰退していったのではないかと考えられる。つまり、縄文晩期の終末期頃（弥生第I様式古・中段階の時期と考えていい）に、集落が定着化の光しを見せ、第I様式新段

階において最大化され、中期初頭には縮少されたことになる。但しこれは、遺物の出土量から見ているので問題点もあると思われる。

弥生時代前期・中期初めにおけるこの付近を見ると、池浦遺跡は、虫取遺跡の北東約500mの低位段丘に位置し、弥生第Ⅰ様式中段階に始まり、中期には規模が著しく縮少される集落遺跡である。その規模は不明であるが、人工V字溝により、住居区を限定していたようである。池上・曾根遺跡においては、弥生前期の集落規模は、広くはないが、中期に至り人工V字溝が掘りなされ、その規模は拡大化されている。これは、周辺地域の小集落が統合されていったものと考えられる。

このように見ると、弥生時代においてこの地域の歴史的背景を知るうえで、虫取遺跡は重要な遺跡といえる。

〈付記〉

これら虫取遺跡の出土遺物を整理報告するにあたり、坂口昌男氏より詳細な御指導をいただき、また入手に困難な資料においても、お忙しい時間をさいて入手して下さり、整理報告に専念する事が出来ました。まがりなりにも整理報告に至ったのも、氏の御協力によるものであり、心から感謝するだいです。

なお、今回報告の縄文土器・縄文要素土器・石製品は、弥生第Ⅰ様式新段階から第Ⅱ様式の時期と共存する遺物もあり、弥生土器の整理が終了した時点で、これらをもう一度、再整理・再考察する必要があるので、弥生土器の整理終了において、虫取遺跡における弥生時代の性格を更に深く究明していきたいと考えています。

(楠山)

第4章 まとめ

今年度報告したのは、板原遺跡、池浦遺跡、池上・曾根遺跡、豊中遺跡、虫取遺跡の5遺跡分である。虫取遺跡分を除いて、発掘調査は、部分調査であり、ある程度のまとまった面積を調査していないため、それぞれの遺跡について、言及するほどの資料は得られなかった。今後もこのような調査が続くかぎり、それはどの成果は期待できない。このままでは、体のいい遺跡破壊と言わざるを得ない。こうした中でも、本報告の中でとりあげるべきものとして、次のものがあげられる。

豊中遺跡第2地点発見の須恵器28・32・33は、最古式のものとして注目される。16の杯は受部の横への振り出しがないタイプの新しいものと思われる。近年、集落跡出土の最古式の須恵器の発見例が増加する中で、須恵器窯跡群に比較的近い豊中遺跡においても、生活用具の一つとして使用されていたことで、流通を考える上で参考となる資料である。同じく豊中遺跡の第1地点・第2地点は、集落の範囲を限定する地点として、砂利層及び砂礫層の発見は意味を持ってくる。虫取遺跡出土遺物は、前年度に報告した第1地点より出土したものである。弥生式土器第I様式新段階～第II様式と共に存しており、縄文時代と弥生時代の接点を探る上で貴重な資料である。ただ弥生式土器の整理が出来ておらず、整理が済み次第報告したい。

(坂口)

(引用文献)

- ① 「板原遺跡試掘調査報告」 豊中古池遺跡調査会 1977・3
- ② 「第2版和田道内遺跡発掘調査概報——板原遺跡——」 大阪府教育委員会 1980・3
- ③ 「泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報2」 泉大津市教育委員会 1984・3
- ④ ③と同じ。
- ⑤ a 「泉大津市東雲遺跡見学会資料」 豊中古池遺跡調査会 1977・6・9
- b 「東雲遺跡発掘調査報告書」 豊中古池遺跡調査会 1977・12
- c 板口昌男「市内の遺跡と発掘調査」(古代史入門講座資料) 泉大津市社会教育課 1982・8
- ⑥ 「豊中・古池遺跡発掘調査概報 そのⅢ」 豊中古池遺跡調査会 1976・3
- ⑦ 「要池遺跡発掘調査概要I」 大阪府教育委員会 1975・3
- ⑧ 「古池遺跡発掘調査概要I」 泉大津市教育委員会 1981・3
- ⑨ 「和泉考古学・別表考古学調査報告1」 泉大津高校地歴部 1958・2
- ⑩ 中井真夫「泉大津市池浦遺跡発掘調査概要」「節・香・仙」第22号 大阪府教育委員会 1972
- ⑪ 池浦遺跡1・2・3次発掘調査 泉大津市教育委員会
- ⑫ 「七の坪遺跡試掘調査報告」 泉大津高校地歴部 1974・3
- ⑬ a 「七ノ坪遺跡発掘調査概報」 大阪府教育委員会 1969・3
b 「七ノ坪遺跡発掘調査概要」 大阪府教育委員会 1974・3
- ⑭ a 「七ノ坪遺跡発掘調査概要」 泉大津市教育委員会 1975・3
- b 「七ノ坪遺跡発掘調査概要II」 泉大津市教育委員会 1982・3
- ⑮ 「七ノ坪遺跡現地説明会資料」 大阪府教育委員会 1982・2
- ⑯ 「豊中遺跡発掘調査概要」 泉大津市教育委員会 1976・3
- ⑰ 「豊中遺跡発掘調査概要II」 泉大津市教育委員会 1978・3
- ⑱ 「豊中遺跡発掘調査概要III」 泉大津市教育委員会 1979・3
- ⑲ 「豊中遺跡発掘調査概要IV」 泉大津市教育委員会 1980・3
- ⑳ 「泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報1(豊中遺跡発掘調査概要V)」 泉大津市教育委員会 1983・3
- ㉑ a 「池上遺跡発掘調査概要I」 大阪府教育委員会 1973・3
- b 「池上遺跡発掘調査概要II」 大阪府教育委員会 1974・3
- c 「池上・曾根遺跡発掘調査概要」 大阪府教育委員会 1978・3
b 「池上遺跡発掘調査概要III」 大阪府教育委員会 1981・3
- ㉒ 「池上遺跡 第2分冊土器編」 大阪文化財センター 1979・3
- ㉓ 「池上・曾根遺跡発掘調査概要IV」 大阪府教育委員会 1983・3
- ㉔ 「泉大津市史」 第二巻史料編I 考古史料編 泉大津市史編纂委員会 1983・10
- ㉕ 「大岡遺跡・助松地区第一次発掘調査報告書」 豊中古池遺跡調査会 1979・3
- ㉖ 「大園遺跡発掘調査概要II」 大阪府教育委員会 1975・3
- ㉗ 「大園遺跡発掘調査概要」 高石市教育委員会 1980・3
- ㉘ 「大園遺跡発掘調査概要IV」 大阪府教育委員会 1981・3
- ㉙ a 「泉大津の遺跡=わたくしたちの祖先の足跡=」 泉大津市教育委員会・泉大津市文化財保護委員会

- b 坂口昌男 「穴師薬師寺跡発掘調査報告」 泉大津市社会教育課 1973・10
- ⑨ ⑩・⑪と同じ。
- ⑫ ⑬と同じ。
- ⑭ 「泉大津の史跡と文化財」 泉大津市教育委員会 1984・3
- ⑮ 「第2阪和国道内道跡発掘調査概報——板原遺跡——」 大阪府教育委員会 1980・3
- ⑯ ⑰と同じ。
- ⑰ ⑱と同じ。
- ⑲ ⑳と同じ。
- ⑳ ㉑と同じ。
- ㉒ ㉓と同じ。
- ㉔ 須恵器の編年については、「陶邑II」 大阪府教育委員会 1977・3を使用しておいたが、(28)の杯身、(32)の甕、(34)の把手付椀については、その時期の編年に入れるのに困難でもあり、属するものとしておいた。
- ㉕ 田中琢「土師器を生産した人びと」『日本の考古学Ⅱ・歴史時代上』 河出書房 1966・6
- ㉖ 「泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報2」 泉大津市教育委員会 1984・3
- ㉗ ㉘・㉙と同じ。
- ㉚ 家根祥多「近畿地方の土器」『縄文文化の研究4 縄文土器II』 雄山閣 1981・11・20
- ㉛ 作成には、「森の宮遺跡 第3・4次発掘調査報告書」 難波宮址顕彰会 1978・12と、山本昭・泉本知秀・福岡澄男「八尾市忍智遺跡の出土遺物について」『大阪文化誌』 第5号 大阪文化財センター 1976・4・20、「湖西線関係遺跡調査報告書」 湖西線関係遺跡調査委員会 1973、「船橋II」 平安学園考古学クラブ、「長原遺跡発掘調査報告」 大阪文化財協会 1982・3改訂、「長原遺跡発掘調査報告II」 大阪文化財協会 1982・3を参考にした。
- ㉜ 「弥七式文化研究の諸問題——近畿とその周辺の中での太田・黒田遺跡——」『古代学研究』 61 古代学研究会 1971・12
- ㉝ 石神怡氏の御教示を得た。
- ㉞ 前器と刃器の区別については、刃部の調整加工の細かさと粗さによって分類しておいた。
- ㉟ 「池上遺跡・第3分冊の2 石器編」 大阪文化財センター 1979・1の第1節石刀丁の項を参考にした。
- ㉟ 「淡輪道路発掘調査概要III」 大阪府教育委員会 1981・3において石錐を分類している。
- ㉢ 石錐101については、縄文時代の遺物と考えていいのか、あるいは弥生第1様式に伴なう時期なのか、不明である。

遺物観察表

池浦遺跡

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
1	31.0	(残存高) 18.2	微砂粒を含む。 乳褐色	内面はナデ 外側はタテハケ	トレンチ内溝 黄茶色粘質土	弥生土器 焼成: 良好

池上・曾根遺跡

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
2	8.6	(残存高) 1.2	1mm程度の白色粒を含む。 外面一赤褐色 内面一乳褐色	内外面ナデ	第1地点 トレンチ内 灰茶色砂質土	土師質皿 焼成: 良好
3	—	(残存高) 4.0	微砂粒を含む。 暗青灰色で乳灰色部が一部にみられる。	内外面ナデ	トレンチ内 暗茶色砂質土	須恵器高杯(脚部) 焼成: 良好
4	30.2	(残存高) 2.5	微砂粒を含む。 乳白色	内外面ナデ	トレンチ内 灰茶色粘質土	土師器 焼成: 良好
5	9.8	(残存高) 1.5	微砂粒を含む。 暗灰色	内外面ナデ	トレンチ内 灰茶色粘質土	瓦器小皿 焼成: 良好

豊中遺跡 第1地点

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
6	—	(残存高) 1.7	1mm程度の白色粒を含む。 赤褐色	内外面剥離の為調整不明	溝2 礫混り茶色砂質土	土師器高杯 焼成: 良好
7	14.0	(残存高) 3.5	1~1.5mm程度の白色粒と、 3.5mm程度の灰色粒を含む。 外面一暗灰色 内面一黒灰色	内外面同軸ナデ	東トレンチ 礫混り茶色砂質土	須恵器高盤 焼成: 良好
8	12.8	(残存高) 3.5	1~1.5mm程度の白色粒を含む。 外面一黒灰色 内面一灰色	内外面同軸ナデ	東トレンチ 礫混り茶色砂質土	須恵器高盤 焼成: 良好

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調 燥	出土場所(層)	備 考
9	12.4	(残存高) 3.0	0.5~1mm程度の白色粒を含む。 暗灰色	内外面同軸ナデ	北地X 礫混り茶色砂質土	須恵器杯芯 焼成:良好
10	11.8	(残存高) 4.2	1mm程度の白色粒を含む。 黒灰色	内外面同軸ナデ	東トレンチ 礫混り茶色砂質土	須恵器杯身 焼成:良好
11	12.4	(残存高) 2.7	1mm程度の白色粒を含む。 灰 色	内外面同軸ナデ	東トレンチ 礫混り茶色砂質土	須恵器杯身 焼成:良好
12	10.8	(残存高) 3.1	0.5~1mm程度の黑色粒を含む。 外面一端灰色 内面一端 色	内外面同軸ナデ	東トレンチ 礫混り茶色砂質土	須恵器杯身 焼成:良好

豊中遺跡 第2地点

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調 燥	出土場所(層)	備 考
13	—	(残存高) 7.4	微砂粒を含む。 乳褐色	外面柱状部ナデへラ磨き 内面柱状部しづり	溝2 灰茶色砂 (礫混り)	土師器高杯(脚部) 焼成:良好
14	—	(残存高) 4.0	1.5mm程度の灰色粒を含む。 乳褐色	外面杯部はハケ目 外面脚部はナデ 内面はナデ	溝2 灰茶色砂 (礫混り)	土師器高杯(脚部) 焼成:良好
15	—	(残存高) 8.0	微砂粒を含む。 外面一乳褐色 内面一灰黑色	外面杯部はハケ目 外面脚部はナデ 内面はナデ	溝2 灰茶色砂 (礫混り)	土師器高杯(脚部) 焼成:良好
16	—	(残存高) 4.4	1mm程度の砂粒を含む。 乳褐色	内外面はナデ	溝2 灰茶色砂 (礫混り)	土師器高杯(脚部) 焼成:良好
17	—	(残存高) 5.6	1~2.5mm程度の石英粒、 砂粒を含む。 乳褐色	内外面はナデ	溝2 灰茶色砂 (礫混り)	土師器高杯(脚部) 焼成:良好
18	—	(残存高) 5.5	1mm程度の砂粒を含む。 茶褐色	内外面はナデ	溝1 北岸上 灰色瓦砂	土師器高杯(脚部) 焼成:良好
19	—	(残存高) 6.2	微砂粒を含む。 乳褐色	内外面はナデ	遺物包含	土師器高杯(脚部) 焼成:良好
20	—	(残存高) 3.8	1~1.5mm程度の砂粒を含む。 暗褐色	内外面はナデ	溝1 北岸上 灰色瓦砂	土師器高杯(脚部) 焼成:良好

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調 整	出土場所(層)	備 考
21	14.2	4.0	(残存高) 1mm程度の砂粒を含む。 外面一赤褐色 内面一黒褐色	外面口縁部はヨコナデ 外面胴部はタケナデ 内面はヨコナデ	遺構上面 灰茶色砂質土	土師器底 焼成:良好
22	10.2	2.9	(残存高) 1mm程度の白色粒を含む。 淡赤褐色	内外面はヨコナデ	溝2 灰茶色砂 (確認)	土師器小型 焼成:良好
23	12.4	4.4	微砂粒を含む。 外面一灰茶色 内面一乳茶色	内外面は回転ナデ	遺物包含	須恵器杯盤 焼成:やや不良
24	13.2	4.2	1~2mm程度の砂粒を含む。 外面一暗灰色 内面一灰 色	内外面は回転ナデ	溝2 上面	須恵器杯盤 外面口縁部に自然釉がか かっている。 焼成:やや良好
25	14.0	4.3	(残存高) 1~4mm程度の砂粒を含む。 外面一暗灰色 内面一灰 色	内外面は回転ナデ	遺物包含	須恵器杯盤 焼成:良好
26	14.8	4.2	(残存高) 微砂粒を含む。 外面一薄基灰色 内面一薄灰色	内外面は回転ナデ	試掘トレンチ 内	須恵器杯盤 外面口縁部に自然釉がか かっている。 焼成:やや不良
27	13.6	3.4	(残存高) 微砂粒を含む。 外面一薄灰色 内面一灰 色	内外面は回転ナデ	試掘トレンチ 内	須恵器杯盤 焼成:良好
28	9.0	5.0	(残存高) 1mm程度の白色粒を含む。 暗灰色	外面底体部は回転へラ有 り 内面は回転ナデ 口縁部は回転ナデ	遺物包含	須恵器杯身 焼成:良好
29	12.6	4.9	(残存高) 1~3mm程度の砂粒を少 し含む。 2mm程度の白色粒を少 し含む。 乳灰色	内外面はナデ	遺物包含	須恵器杯身 焼成:やや良
30	—	5.4	(残存高) 1~2mm程度の白色粒を 含む。 外面一暗灰色 内面一灰 色	外面底部はヘラナデ 内外面は回転ナデ	遺物包含	須恵器杯身 底部にヘラ記号あり 焼成:良好
31	—	3.9	(残存高) 1mm程度の白色粒を含む。 白灰色	内外面は回転ナデ	溝1 灰白色砂	須恵器杯身 焼成:やや良好
32	22.4	7.7	(残存高) 微砂粒を少しあむ。 暗灰色	内外面は回転ナデ 外面口縁部に液状文有り。	遺構上面 灰茶色砂質土	須恵器 焼成:良好
33	16.0	5.2	(残存高) 1~1.5mm程度の白色粒を 含む。 暗灰色	外面はナデ 内面はタケナデ	溝2 上面	須恵器 焼成:良好

No	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調 整	出土場所(層)	備 考
34	10.4	6.0	1mm程度の白色粒を含む。 外面一乳茶灰色 内面一乳茶灰色	外面底部から胴下部は手 持ちヘラ削りのうえヨコ へラ削り 外面胴上部から口縁はヨ コナデ 内面はヨコナデ 外面側部に波状文有り。	遺物包含	須恵器把手付楕 焼成:やや不良
35	—	3.2	微砂粒を含む。 暗茶褐色	内外面はナデ	遺構上面 灰茶色砂質土	土師質高級 焼成:良好
36	—	1.8	緻密 外面一茶褐色 内面一綠茶色	内外面はナデ	遺構上面 灰茶色砂質土	陶磁器碗 焼成:良好

No	法 量(cm)	石 材・色 調	調 整	出 土 場 所(層)	備 考
37	大きさ 6.7×3.0 最大厚 2.3	無鉱片岩。 明灰色 (部分的に乳灰色)	—	溝2 灰茶色砂 (埋没)	緑石

虫取遺跡

No	口徑(cm)	器高(cm)	胎 土・色 調	調 整	出 土 場 所(層)	備 考
38	—	(残存高) 3.3	乳茶灰色の微砂粒を多く 含む。 茶褐色	沈線文・磨消	第2地点 十字トレンチ 暗茶色粘質土	縄文土器(後期中津式) 深鉢
39	—	(残存高) 3.2	乳茶灰色の微砂粒を多く 含む。 外面一灰茶色 内面一暗茶褐色	沈線文・磨消	第1地点 暗茶色粘質土	縄文土器(後期中津式か) 深鉢
40	—	(残存高) 2.5	乳茶灰色の微砂粒を多く 含む。 外面一灰茶色 内面一暗茶褐色	沈線文・磨消	第1地点 東トレンチ	縄文土器(後期中津式か) 深鉢
41	—	(残存高) 5.9	1~3mm程度の白色粒を多 く含む。 暗灰茶色	内外面は黒色磨研	第1地点 溝4 黄茶褐色粘質 土	縄文土器(晚期須賀里VI b式系) 浅鉢 焼成:良好
42	—	(残存高) 2.3	1mm程度の乳茶色粒を多 く含む。 外面一暗茶色 内面一黑 色	内外面は黒色磨研	第1地点 溝4 黄茶褐色粘質 土	縄文土器(晚期須賀里VI b式系) 浅鉢
43	—	(残存高) 3.5	3mm程度の石英粒と3~ 5mm程度の白色粒を少 し含む。 茶黑色	内外面は黒色磨研	第1地点 東トレンチ北 地区陰木部 暗茶褐色粘質土	縄文土器(晚期須賀里VI b式系) 浅鉢 焼成:良好

No.	D(径) (cm)	器高(cm)	胎土・色調	調整	出土場所(層)	備考
44	—	(残存高) 3.0	1.5mm程度の石英粒を少し含む。 外面一乳灰茶色 内面一灰茶色	外面は原体の細かいものによるヨコナゲ 内面はナゲ	第1地点 東トレント北 地区拡張部 暗茶色粘質土	縄文土器(晚期滋賀里IV 式系) 深鉢 口縁部と尖端部に剥み出 がある。 A類
45	—	(残存高) 5.2	1mm程度の雲母を少し含む。 1mm程度の砂粒を含む。 暗茶褐色	内外面はナゲ	第1地点 暗茶色砂質土上	縄文土器(晚期滋賀里IV 式系) 深鉢
46	—	(残存高) 5.7	1mm程度の砂粒を含む。 外面一乳灰茶色 内面一暗灰色	内外面はナゲ	第1地点 溝4 青灰色粘土上	縄文土器(晚期滋賀里IV 式系) 深鉢
47	—	(残存高) 5.5	1mm程度の砂粒を含む。 外面一乳灰茶色 内面一灰茶色	内外面はナゲ	第1地点 溝4 黄茶褐色粘質土	縄文土器(晚期滋賀里IV 式系) 深鉢
48	—	(残存高) 4.9	1mm程度の砂粒を少し含む。 外面一暗灰色 内面一暗灰色	内外面はナゲ	第1地点 溝4 黄茶褐色粘質土上	縄文土器(晚期滋賀里IV 式系) 深鉢
49	—	(残存高) 3.3	1~2mm程度の砂粒を含む。 外面一乳灰茶色 内面一暗灰色	内外面はナゲ	第1地点 溝4 黄茶褐色粘質土上	縄文土器(晚期滋賀里IV 式系) 深鉢
50	—	(残存高) 5.0	0.5mm程度の雲母を少し含み、1mm程度の砂粒を含む。 外面一乳灰茶色 内面一暗灰色	内外面はナゲ	第1地点 溝4 黄茶褐色粘質土	縄文土器(晚期滋賀里IV 式系) 深鉢
51	—	(残存高) 4.8	0.5~2mm程度の白色粒を含む。 外面一暗茶褐色 内面一暗灰色	内外面はナゲ	第1地点 落ち込み3 第1層 暗灰色粘質土上	縄文土器(晚期滋賀里IV 式系) 深鉢 焼成:良好
52	—	(残存高) 5.5	1mm程度の雲母を含み、1mm程度の砂粒を含む。 外面一乳茶色 内面一黑灰色	内外面はナゲ	第1地点 溝4 黄茶褐色粘質土上	縄文土器(晚期船橋式か) 深鉢
53	—	(残存高) 3.0	1mm程度の砂粒を多く含む。 外面一茶色 内面一暗茶色	内外面はナゲ	第1地点 黄褐色粘質土	縄文土器(晚期船橋式か)
54	—	(残存高) 2.6	0.5~2mm程度の黒色粒・ 白色粒と4mm程度の石英 粒を含む。 外面一乳茶褐色 内面一暗灰色	内外面はナゲ	第1地点 東トレント中 地区	縄文土器(晚期) 深鉢 焼成:良好
55	—	(残存高) 3.1	微砂粒を少し含む。 暗茶褐色	内外面はナゲ	第1地点 溝4 黄茶褐色粘質土	縄文土器(晚期船橋式系) 深鉢 焼成:良好

No	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	画 繪	出土場所(層)	備 考
56	—	(残存高) 3.1	1mm程度の白色粒を少しと1~2mm程度の黒色粒、0.5~3mm程度の砂母片を含む。 外面一乳茶褐色 内面一黒灰色	内外面はナデ	第1地点 溝4 暗茶灰色粘質土	縄文土器(晚期) 深体 焼成:良好
57	—	(残存高) 2.0	1~2mm程度の雲母を少し含み、2mm程度の砂粒を含む。 茶色	内外面はナデ	第1地点 溝4 黄茶褐色粘質土	縄文土器(晚期長原式) 深鉢
58	—	(残存高) 2.5	1mm程度の雲母を含む。 外面一茶色 内面一黒色	内外面はナデ	第1地点 溝4	縄文土器(晚期長原式)
59	—	(残存高) 3.0	1mm程度の雲母を少し含む。 暗灰色	内外面はナデ	第1地点 溝4 青灰色粘紗土	縄文土器(晚期長原式)
60	—	(残存高) 2.5	1mm程度の雲母を少し含み、4mm程度の石英粒を含む。 乳灰色	内外面はナデ	第1地点 暗茶灰色粘質土	縄文土器(晚期長原式) 深鉢
61	24.0	(残存高) 11.5	2mm程度の砂粒を多く含む。 茶色	内外面はハケ日	第1地点 溝4 暗茶灰色粘質土	弥生土器罐 焼成:良好
62	21.0	(残存高) 7.1	2~3mm程度の砂粒を少し含み、1~2mm程度の砂粒を多く含む。 外面一暗茶褐色 内面一茶褐色	内外面はヨコナデ	第1地点 溝4 暗茶灰色粘質土	弥生土器罐 口縁部から肩部にかけてスヌ付着あり。 焼成:良好
63	22.6	(残存高) 8.2	2~5mm程度の砂粒を含む。 暗茶褐色	外面口縁部はヨコナデ 外面胴部はヨコヘラ削り 内面はヨコナデ	第1地点 溝4 暗茶灰色粘質土	弥生土器罐 焼成:良好
64	—	—	2~3mm程度の石英粒を少し含む。 乳茶色	外面口縁部はタテヘラナデ 外面胴部はヨコヘラ削り 内面はナデ	第1地点 溝4 暗茶灰色粘質土	弥生土器罐
65	—	(残存高) 8.2	3~5mm程度の砂粒を含む。 暗茶褐色	外面口縁部はタテヘラナデ 外面胴部はヨコヘラ削り 内面はナデ	第1地点 溝4	弥生土器罐 焼成:良好
66	—	—	2~3mm程度の石英粒を少し含む。 乳茶色	外面口縁部はタテヘラナデ 外面胴部はヨコヘラ削り 内面はナデ	第1地点 溝4 暗茶灰色粘質土	弥生土器瘦胴部片
67	—	—	2~3mm程度の石英粒を少し含む。 乳茶色	外面口縁部はタテヘラナデ 外面胴部はヨコナデ 内面はナデ	第1地点 溝4 暗茶灰色粘質土	弥生土器瘦胴部片

No.	口径(cm)	器高(cm)	胎土・色調	調 素	出土場所(層)	備 考
68	—	—	2~3mm程度の石英粒を少しあわす。 乳茶色	外面口縁部はタテヘラナデ 外面胴部はヨコナデ 内面はナデ	第1地点 溝4 暗茶灰色粘質土	弥生土器腹脚部片
69	—	—	2~3mm程度の石英粒を少しあわす。 乳茶色	外面口縁部はタテヘラナデ 外面胴部はヨコナデ 内面はナデ	第1地点 溝4 暗茶灰色粘質土	弥生土器腹脚部片
70	—	—	2~3mm程度の石英粒を少しあわす。 乳茶色	外面口縁部はタテヘラナデ 外面胴部はヨコナデ 内面はナデ	第1地点 溝4 暗茶灰色粘質土	弥生土器腹脚部片
71	—	—	2~3mm程度の石英粒を少しあわす。 乳茶色	外面口縁部はタテヘラナデ 外面胴部はヨコナデ 内面はナデ	第1地点 溝4 暗茶灰色粘質土	弥生土器腹脚部片
72	—	—	2~3mm程度の石英粒を少しあわす。 乳茶色	外面口縁部はタテヘラナデ 外面胴部はヨコナデ 内面はナデ	第1地点 溝4 暗茶灰色粘質土	弥生土器腹脚部片
73	—	—	2~3mm程度の石英粒を少しあわす。 乳茶色	外面口縁部はタテヘラナデ 外面胴部はヨコナデ 内面はナデ	第1地点 溝4 暗茶灰色粘質土	弥生土器腹脚部片
74	—	—	2~3mm程度の石英粒を少しあわす。 乳茶色	外面口縁部はタテヘラナデ 外面胴部はヨコナデ 内面はナデ	第1地点 溝4 暗茶灰色粘質土	弥生土器腹脚部片
75	—	—	2~3mm程度の石英粒を少しあわす。 乳茶色	外面口縁部はタテヘラナデ 外面胴部はヨコナデ 内面はナデ	第1地点 溝4 暗茶灰色粘質土	弥生土器腹脚部片

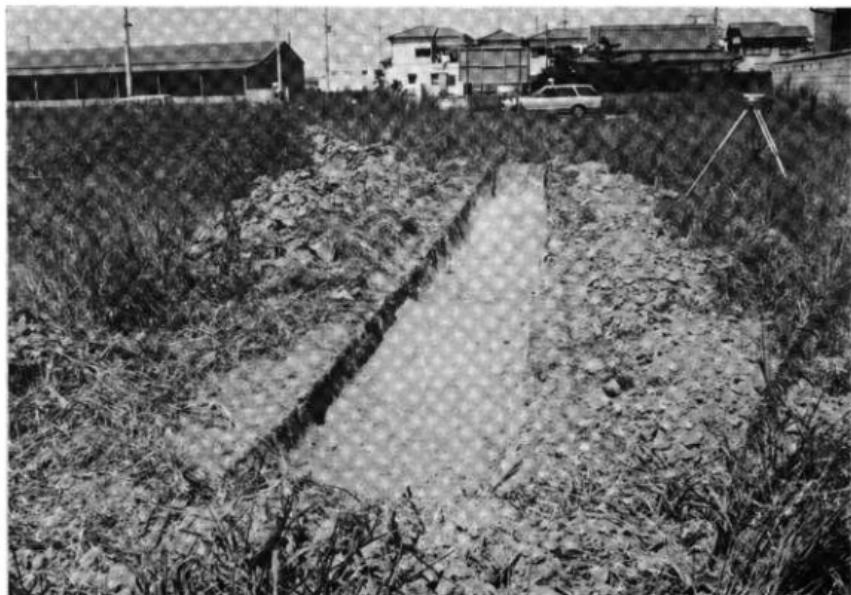
No.	法 量(cm)	石 材・色調	加 工	出土場所(層)	備 考
76	大きさ 2.3×1.8 (残存長) 最大厚 0.3	サヌカイト。 灰黒色	二辺の片面を細かく加工 (削離調整)し、もう片面をおおまかに加工(削離) している。	第1地点 溝4 茶褐色粘質土	石錠
77	大きさ 1.8×1.5 (残存長) 最大厚 0.2	サヌカイト。 灰黒色	二辺を細かく加工(削離 調整)している。	第1地点 溝4 茶褐色粘質土	石錠(四基無基式)
78	大きさ 2.3×1.8 最大厚 0.4	サヌカイト。 灰黒色	二辺をおおまかに加工。 (削離)している。	第1地点 西側 茶色砂質土	石錠(未調整)
79	大きさ 2.4×1.4 (残存長) 最大厚 0.3	サヌカイト。 灰黒色	二辺を細かく加工。	第1地点 溝4	石錠

No.	法 量(cm)	石 材 ・ 色 調	加 工	出 土 場 所 (層)	備 考
80	大きさ 3.2×2.8 最大厚 0.4	サヌカイト。 灰黒色	二辺の加工はあまり施されていない。	第1地点 溝4	石版(未調査)
81	大きさ 10.5×2.5 最大厚 1.0	サヌカイト。 灰黒色	剝離調整加工。	第1地点 溝4 暗茶色粘質土	石棺
82	大きさ 5.3×3.1 (残存長) 最大厚 1.7	サヌカイト。 灰黒色	剝離調整加工。	第1地点 溝4 茶褐色粘質土上	石棺
83	大きさ 5.1×2.7 (残存長) 最大厚 0.8	サヌカイト。 灰黒色	剝離調整加工。	第1地点 溝4 暗茶灰色粘質土上	石棺
84	大きさ 7.1×6.3 (残存長) 最大厚 0.3	サヌカイト。 暗灰色	端部は細かく加工。 体部は剝離。	第1地点 溝4 セクション1 茶褐色粘質土	石鏡
85	大きさ 7.8×3.8 最大厚 1.0	サヌカイト。 暗灰色	剝離加工。	第1地点 溝4 茶褐色粘質土	石鏡
86	大きさ 6.3×3.7 最大厚 0.9	サヌカイト。 黒灰色	体部を剝離加工し、刃部 は細かく加工。	第1地点 溝4	横形削器 刃部は二辺。
87	大きさ 5.4×4.1 最大厚 1.0	サヌカイト。 灰黒色	体部を剝離加工し、刃部 は細かく加工。	第1地点 溝4 茶褐色粘質土上	横形削器
88	大きさ 3.7×3.5 最大厚 0.6	サヌカイト。 暗灰墨色	体部を剝離加工し、刃部 は細かく加工。	第1地点 落込溝3 第2層 灰茶色粘質土上	削器 刃部は二辺。
89	大きさ 8.7×3.7 最大厚 0.7	サヌカイト。 暗灰色	体部を剝離加工し、刃部 は細かく加工。	第1地点 溝4	削器
90	大きさ 5.0×2.7 最大厚 0.7	サヌカイト。 暗灰色	体部を剝離加工し、刃部 は細かく加工。	第1地点 暗茶色粘質土上	削器
91	大きさ 4.6×2.7 最大厚 0.9	サヌカイト。 暗灰色	体部を剝離加工し、刃部 は細かく加工。	第1地点 東側 茶色砂質土上	削器
92	大きさ 4.5×2.3 最大厚 0.5	サヌカイト。 灰黒色	剝離加工。	第1地点 西側 茶色砂質土上	不定形刃器
93	大きさ 5.0×2.4 最大厚 0.6	サヌカイト。 灰黒色	剝離加工。	第1地点 暗茶色粘質土上	不定形刀器

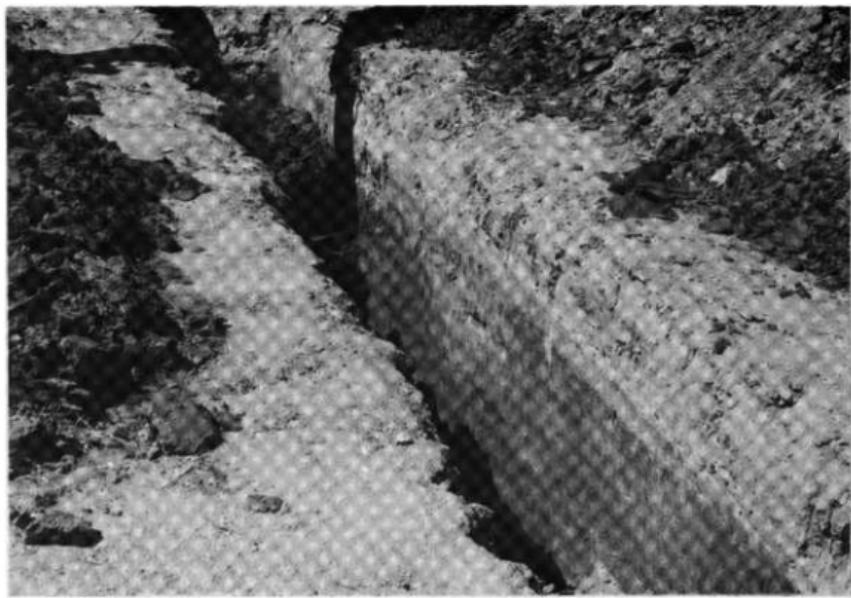
No.	法 量(cm)	石 材・色 調	加 工	出土場所(層)	備 考
94	大きさ 4.1×4.3 最大厚 1.2	サメカイト。 灰黒色	剥離加工。	第1地点 縄土	不定形刃器
95	大きさ 3.3×3.0 最大厚 0.9	サメカイト。 黒灰色	剥離加工。	第1地点 溝4 暗茶色粘質土	不定形刃器
96	大きさ 4.1×3.9 最大厚 0.5	サメカイト。 灰黒色	剥離加工。	第1地点 溝4 暗茶褐色粘質 土	不定形刃器
97	大きさ 2.9×3.2 (残存長) 最大厚 0.7	緑色片岩。 緑色	全面研磨。	第1地点 溝4 暗茶灰色粘質 土	石斧丁
98	大きさ 4.4×8.3 (残存長) 最大厚 0.7	緑色片岩。 緑色	全面研磨。	第1地点 溝4 暗茶色粘質土	石斧丁
99	大きさ 3.5×9.2 (残存長) 最大厚 0.6	緑色片岩。 緑色	全面研磨。	第1地点 溝4 暗茶灰色粘質 土	石斧丁
100	大きさ 10.2×6.5 最大厚 4.4	輝緑岩。 灰緑色	全面研磨。	第1地点 溝4	石斧
101	大きさ 12.0×8.7 最大厚 4.0	砂岩。 灰色	長軸の両端部中央部を打 ち欠いている。	第1地点 溝4 暗茶色粘質土	石斧
102	大きさ 9.9×4.5 最大厚 2.4	砂岩。 灰色	—	第1地区 溝4 暗茶灰色粘砂 土	砾石
103	大きさ 12.2×4.8 最大厚 3.7	砂岩。 灰色	—	第1地点 溝4 セクション2 黄茶色粘砂土	砾石
104	大きさ 11.8×6.9 最大厚 2.8	砂岩。 灰色	—	第1地点 縄土	敲石
105	大きさ 13.1×8.1 最大厚 3.6	砂岩。 灰色	—	第1地点 溝4 暗茶色粘質土	凹石
106	大きさ 7.4×7.8 最大厚 3.1	砂岩。 灰色	—	第1地点 溝4 暗茶灰色粘質 土	凹石 (敲石としても使用)

(柏山・小林・溝4)

図版



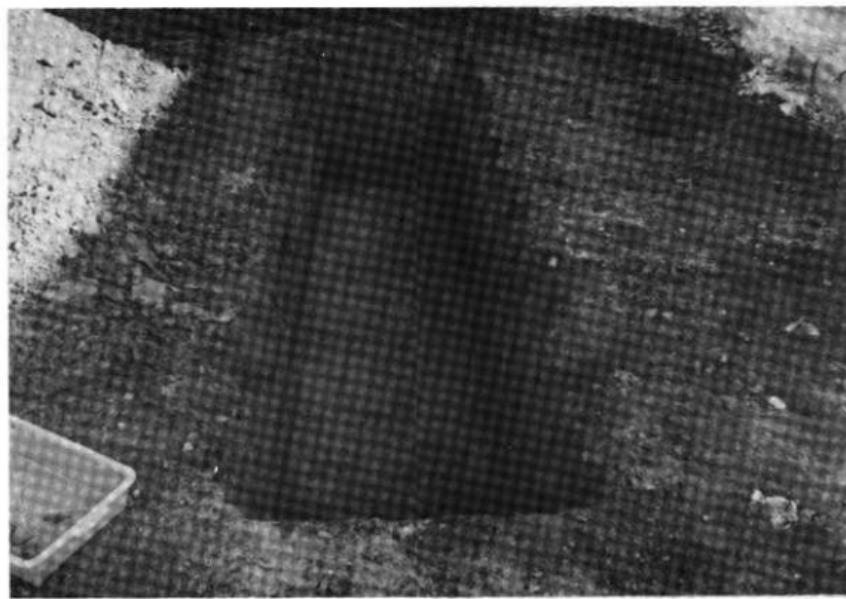
板原遺跡 トレンチ



池浦遺跡 トレンチ



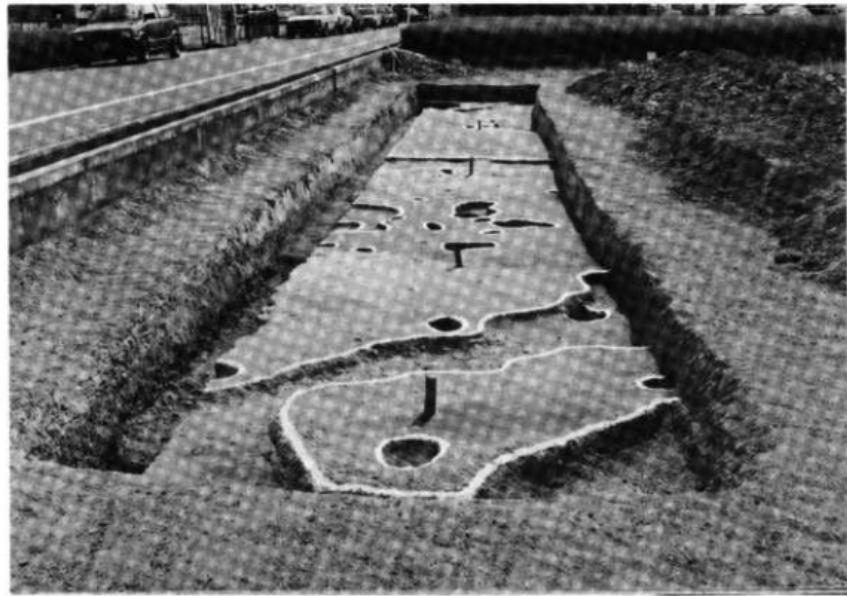
池上・曾根遺跡第1地点トレンチ



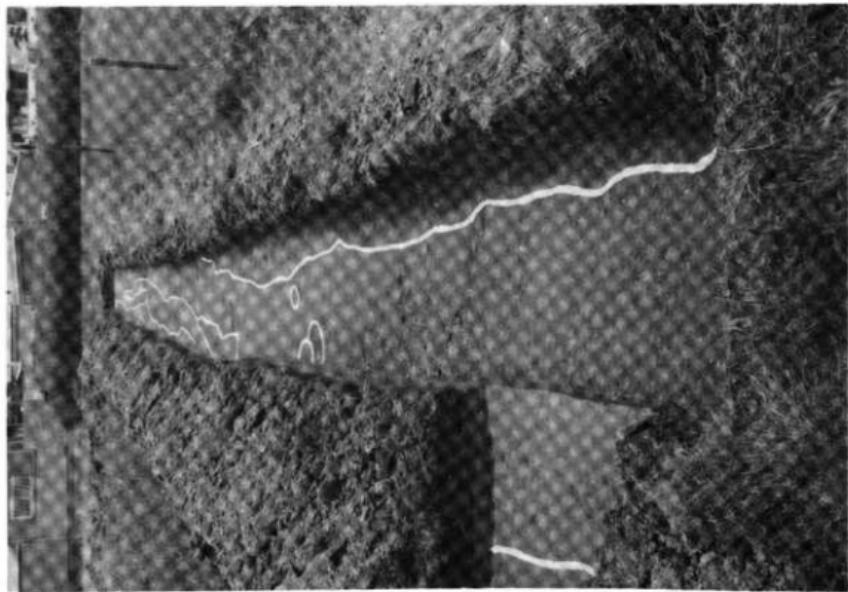
池上・曾根遺跡第2地点トレンチ



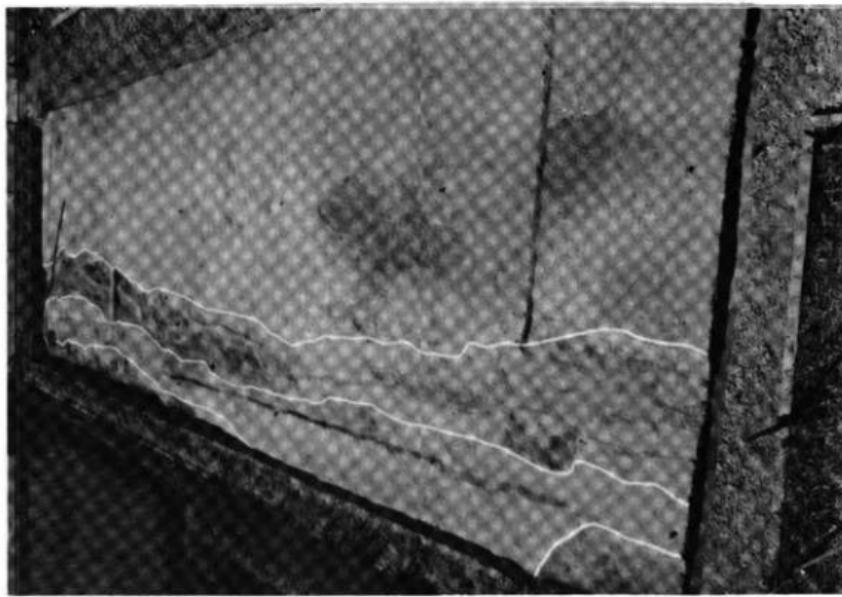
豊中遺跡第1地点ピット（北から）



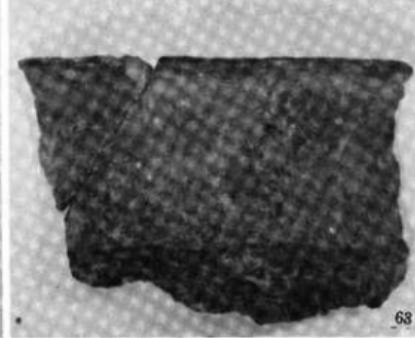
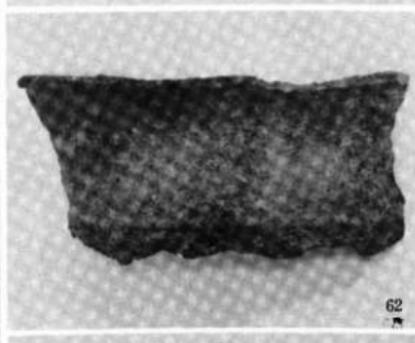
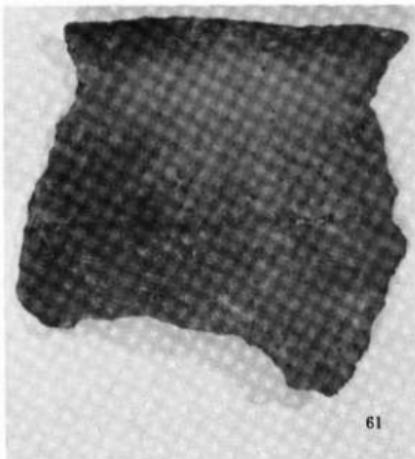
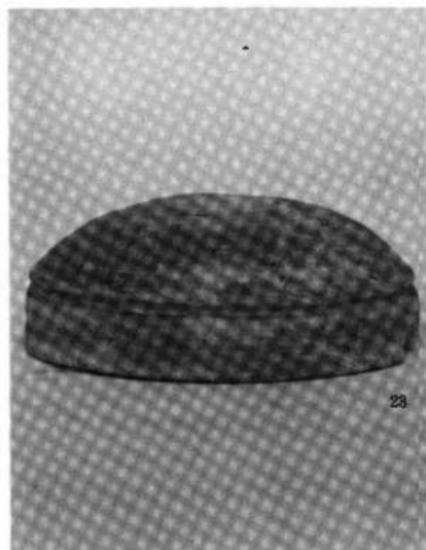
豊中遺跡第1地点全景（北から）



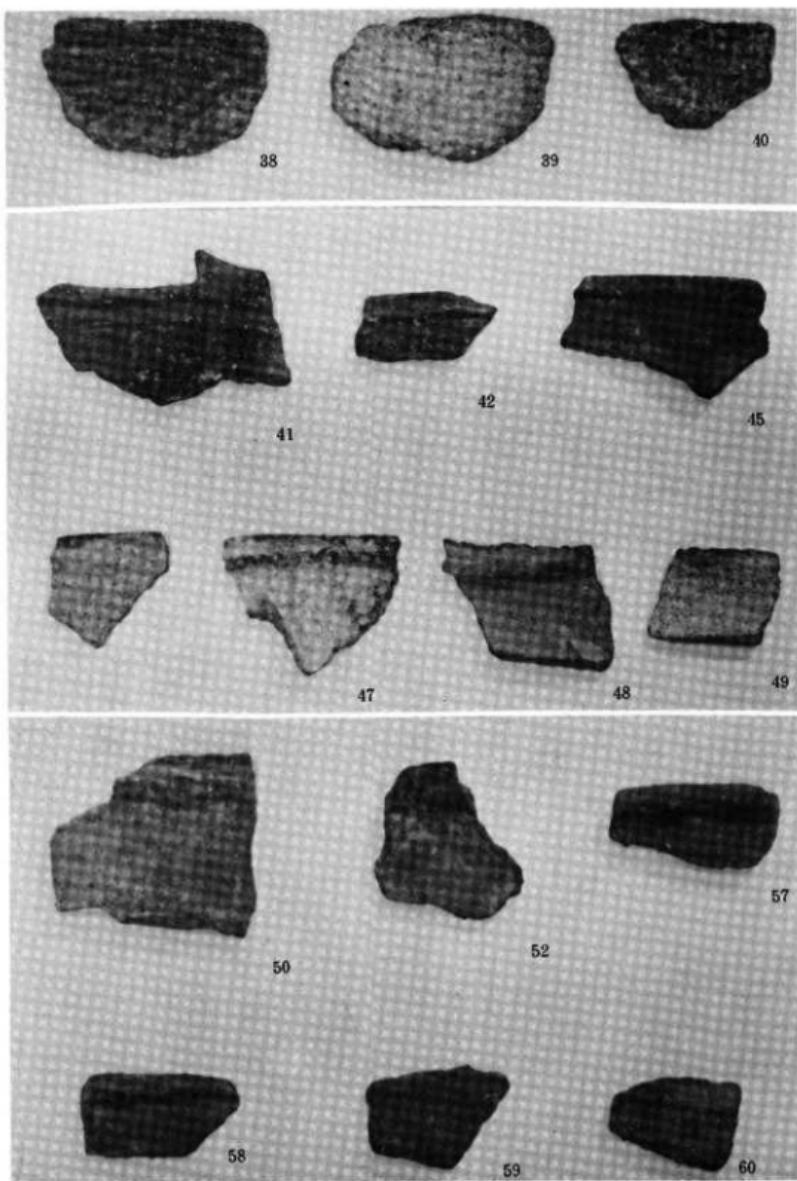
豊中遺跡第2地点試掘 トレンチ



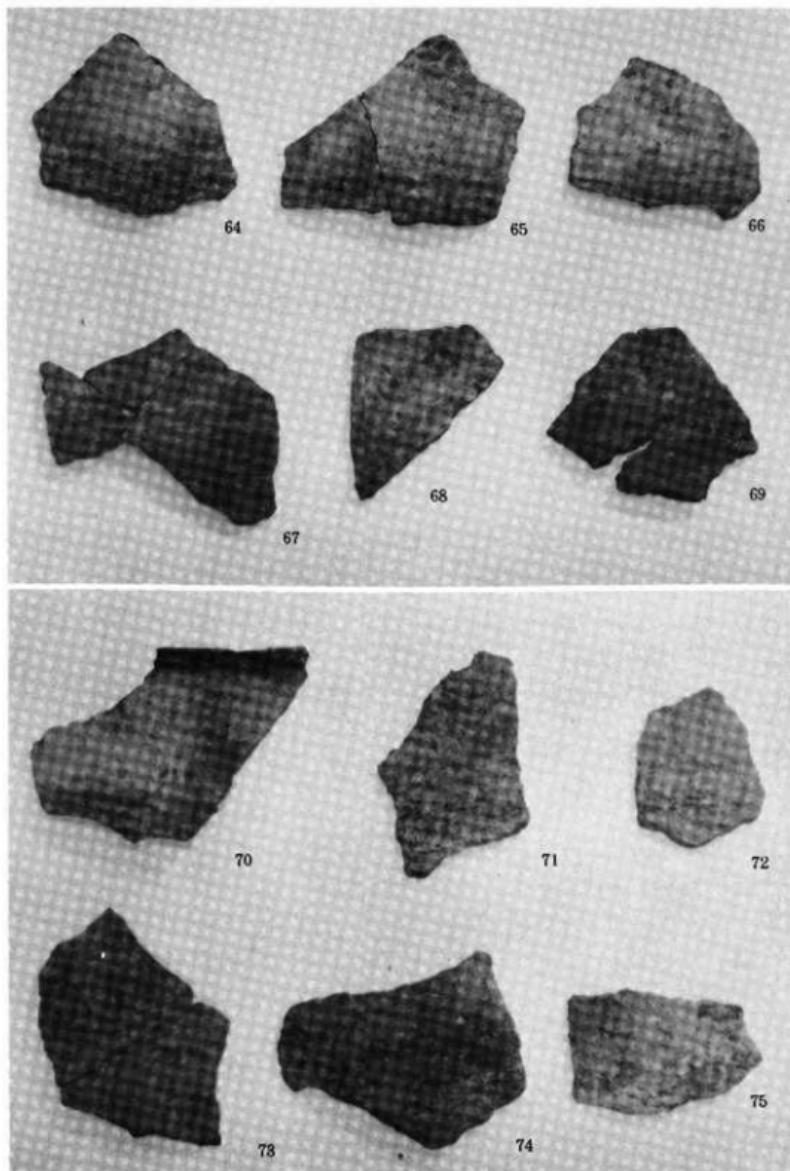
豊中遺跡第2地点全景(東から)

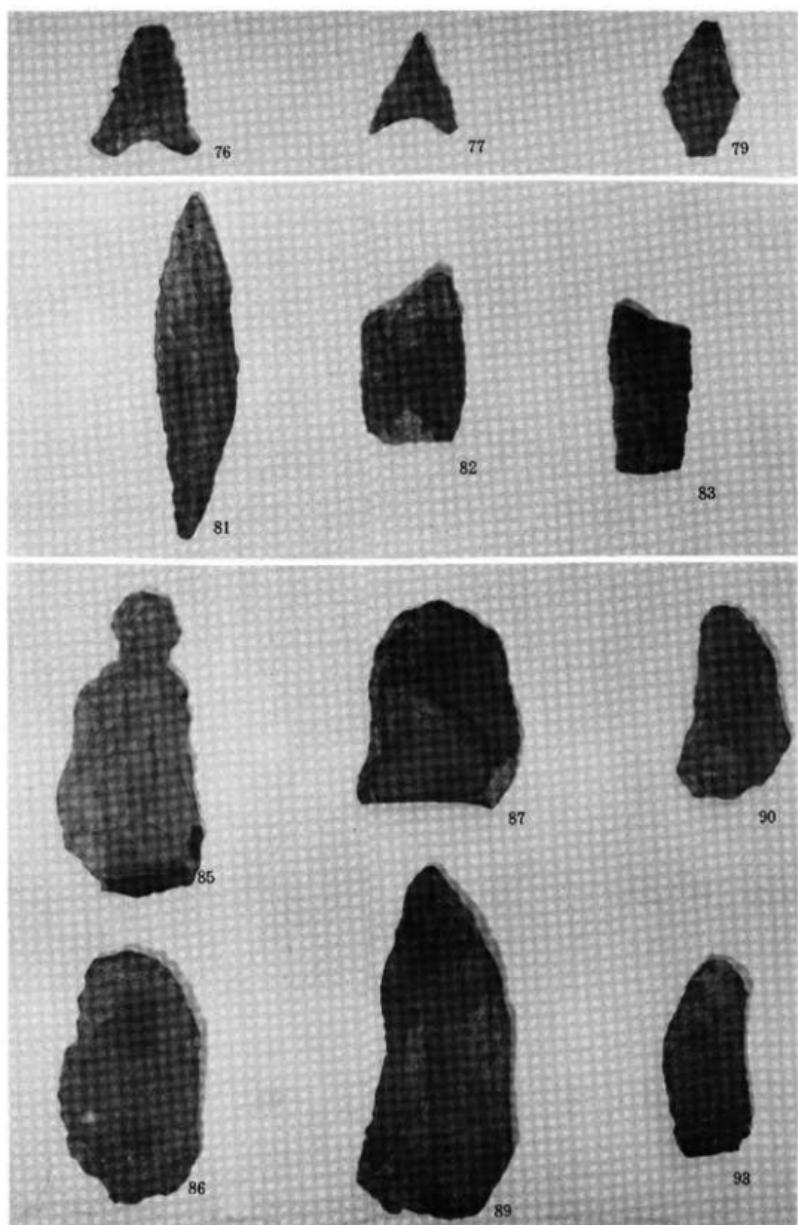


出土遺物

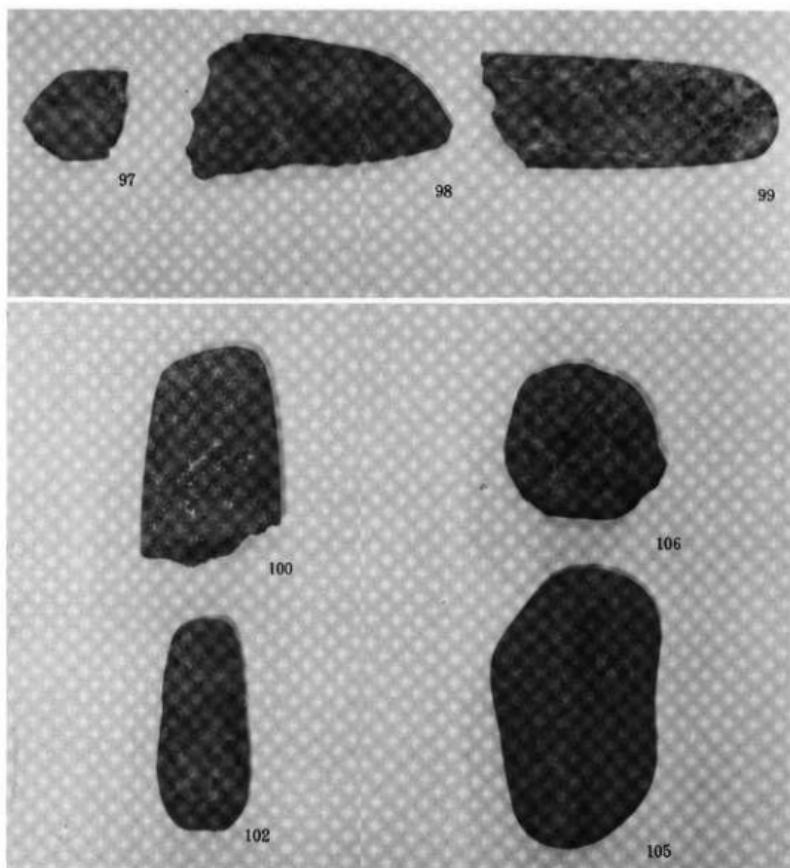


出土遺物





出土遺物



出土遺物

泉大津市文化財調査報告10
泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報3

1985年3月

発行 泉大津市教育委員会
編集 社会教育課
泉大津市東雲町9番12号

印刷 横近畿出版印刷

